

249

43

085970-000-7

249-43

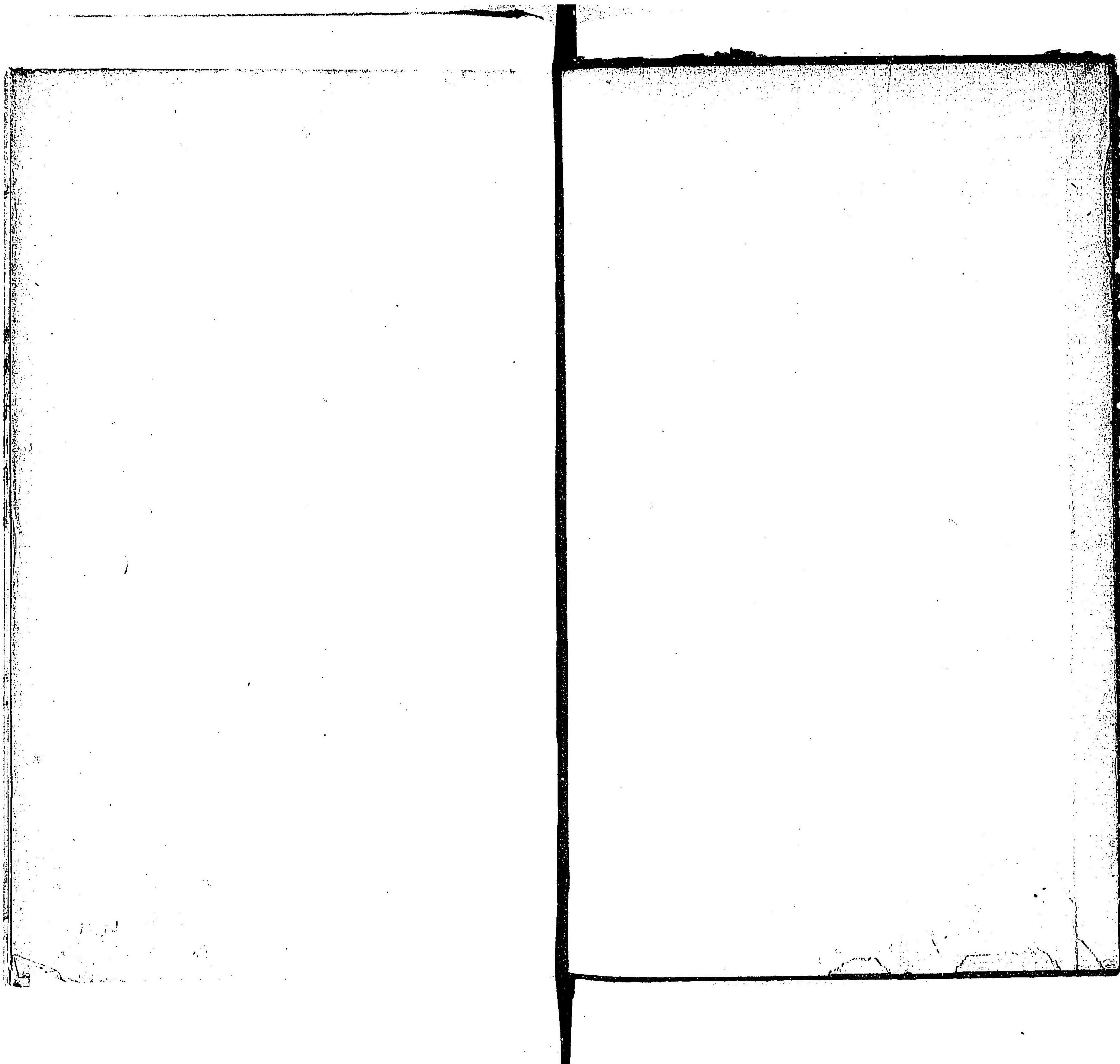
古今琉歌集

富川 盛陸/編

M44

DBD-0595





249  
478



序

歌は心の聲なり喜怒哀樂の性情内より動きて詠歌の聲外に發するものあり即人情の花  
咲きたるものあり我琉歌の如きは詞調和歌と稍異なるのみならず其趣致に至りても  
亦獨特の味ひあり其詞に雅俗の別あり體は長短の異なるれこそ其時の古今世の風俗に  
ともあひたるに外あらざるなり

琉歌之源を遠き神代に發したるもの、如き蓋神歌オモイの如きは其根源あらん然れども英  
祖王の時代に至り上句十六下句十四の體始めて顯るれ近代に至り仲風、長歌、口説、  
つらね等の如き體起りその間歌人亦尠ならず秀逸の詠歌實に多し然れどもみま寫本  
なるを以て後世に誤謬を傳へ或は湮滅し歸するの恐あり編者これを遺憾とするこ  
久し故いま古今の秀逸を輯集し現今の人にも見せ後世にも傳はれるを以て梓に附  
す世の讀者之を玩味し琉球詞界乃光輝をして炳耀燦爛たらんめは獨り編者の幸のみ  
ならざるあり

明治廿八年初秋 芭蕉窓の下に於て 編者誌す

凡例

一本集は故小橋川朝昇大人の編輯したる歌集に基き其他數本を考して取捨編成したるものなり

一今人の詠歌にして秀逸なるものは集蒐し之を録せり然れども古今乃區別を明らよせり

一原本には題を掲けたるもの尙れども至りて少なきを以て本集は之を畧す

一本集空欄を設たるは讀者をして疑問及意見を記入せしむるの便に供せんか爲めあり

一節組は彼の唱歌の名人野村安趙氏の撰による

一本集編輯に就ては護得久朝置、保榮茂朝意、大宜見朝昆、又吉全道、佐久本喜章諸氏の補助を蒙るこ多し記して以て聊か其勞を好意を謝す

古今琉歌集目錄

春之部	一葉	夏之部	五葉
秋之部	七葉	冬之部	十葉
戀之部	十二葉	仲風	三十葉
雜之部	三十四葉		

古今琉歌集

●春

尙 瀨 王

コテイ節

年やたちわつえつたる乃そらよ、わつつき出たるまつ乃みこ  
 年やたちわつえつたる乃そらよ、わつつき出たるまつ乃みこ  
 山乃そらよきよ袖やひるこもよ平ひるるをあやたつね平志や乃  
 乃松こ、もよきある願志ゆ、そみこま志そへる五葉乃小まつ

尙 育 王

昔のら月や秋こてやそひゆをのえるやえあの上よてるあきそら  
 雪のみままつ乃るにうちむあそみこま志そへる千代にそある  
 常磐ふるまつ乃そらにるのせ乃うれ志たこつれや千代乃ひ、き

尙 泰 侯

馬は鞭のけつたを志むきみ平志やのちみたつやま乃はあ乃よ志き  
 春をめにそてやぬれらもえあ乃ちりこはぬうちむちて見たあ  
 庭よそくうめ乃よ平ひよひをきて月もやま乃端よ、そをゆら

久米具志川王子朝盈

(護得久按詞先)

コテイ節

めくでたるくれはこきをあるまつもみこり志そへて、ひろこまきる

白瀬走川節

春乃やまのたやはあのみつゝみはろふくうつるあけのきとらき

神村 親方

北谷 王子朝騎

(大村按司之先)

コテイ節垣ノ花  
節カキヤテ風節

常盤ふる松乃あたることあひきめいつもえるくれはははるこまきる

玉城 親方朝薫

(邊土名里中先)

イケントウ節

蕾をる花にちかつきゆるをへるいつの夜のつゆにきかちそゆ  
散る根にふる花もはる來ればまたもはるまきることのうれえや

平敷 屋朝 敏

花にませたてゝにみひまさらぬは禁止あらぬはへる志のふたゝ  
春や野も山も百合草のはあきりゆきをゆる袖の匂の志やらえや

本部 按司朝救

ねきめたころきまたのそととこめはにわにさく梅の志やらえにみひ

義村 王子

御代のはるあせにきそわれて出る深山うくひまの聲の志やらえや

越來 按司

みやまうくひすや節やしらねともうめの匂しちこ春やしゆる

與那原 親方

コテイ節

わかみつにたもてあらゝ九重にのみて首里かあし美御機をかま

小祿 按司朝恒

みこしきしそへてはるかせにあひくにはの青柳のいろ乃きとらさ  
匂やちやうものこせまた春の間やあかぬあかめゆるはあのおさけ

森山 親方昌勝

(平良親方父)

ことふきや千代の春にいつかかけてくりかへしかへしまつ乃みこり

渡久山里親雲上政規

あたら花やすかみる人やをらぬあたにさきあきるにほひのたしさ  
いつの夜のつゆにうち笑てさきやかまかかねてをたる花のつほみ

讀人 しらぬ

コテイ節

はるにふくかせや首里天かあしあひくわかくさやたみのすかた  
嬉しさやめくはつはるまおれはみこりさしそへる松のきとらさ

白瀬走川節

高難節

湊原節

春乃やま川にちりうかふさくらすくひあつめてさきこやまぢゆる  
かさまたごふらぬふゆるはるさめや野山たちかくすかすみこもて  
霞たつやまのうめのはあさかまかせにさそわれる匂のしほらしや  
蕾てをるはあのをひの間にさきゆあさけあつゆのしのでふたら  
梅や冬こもりせつとまかかねてはあの咲くはるにあふかうれしや

謝敬節

はるの夜やねやのうちまてもうめの手枕にうつる匂のしほらしや  
 初はるのうめのふまつほをすや深やまうくひすのこへごまぢゆら  
 深山うくひすも咲やこのはふのほひたくるかせのたぐりまぢゆら  
 待かねてをたら深やまうくひすのはつはるのうめのはふのまほひ  
 匂ひ咲うめのちりうてるまでもしのふうくひのたごもふぢらぬ  
 梅ごうくひすやあかぬ縁さらめのきゆてはるくれはまたもそゆさ  
 深やまうくひすのせつやわすれらぬうめの匂忍てほけるまほらしや  
 初春にふれは深やまうくひの咲うめに來ふくこゑのしほらしや  
 うくひのほかにしるひこやなひさめたくやまに咲るうめの色香  
 春やえなさか深山うくひのほひのてほける聲のしほらしや  
 七重八重たてるまじうちの花もにほひうつちまての禁止やなひさめ  
 春にうかされてはなのもこしの袖にほひうつちもごるうれしや  
 はつはるにむきてふさつはふみれははふも咲きとらさふりもささ

謝敬節

淡原節

淡原節謝敬節

イケントウツ節

護得久朝置

今歸仁朝敷

美代の春かせにふたつふぬはふのさきゆて匂ましゆる玉のまかき  
 こしもたちかへてはつはるまふれは朝夕とろこひのこゝろはかり  
 きくも嬉さやうめのほひしのふ深やまうくひの千代のはつこゑ

あけくもごつれてふけるうくひのこゑにはつはるの夢やさめて

仲村里親雲上良常

はへる身やどかて朝夕はふのうへまほそてごかめゆる人やをらぬ

小橋川里親雲上朝祥

尋ねゆるはふのちかくあてさらめ忍ふ身かそてにほむたちゆす

大里朝要

つほてをるはふやいつの夜のつゆに咲ちあかめゆかあさもゆさも

保榮茂朝意

はるもいな、たい果報こごも目の前こゝろうきやかゆるこしや今年

上江洲由恕

いつも新玉のこしのこごあらなうれしこごはかりいきやむきちや

上江洲由具

御望の梅やあけほしや、あすかやごるうくひすのふかはきやしゆか

小那覇朝亮

はるまさくうめや深山うくむすのなごの物ごもてふけるしほらしや

大宜味朝昆

深山うくむすに誰をしらちやかやたごなしもふぢらぬ春やきやすか

田崎朝用

あかれとるみつにうかふさかつきのあまりから汲るけふのほそむ  
佐久本喜章

はるさめまぬれてつみこたる若菜たんちゆより外にたるに呉ゆか  
平良里親雲上

めくてはるくれは野邊のも草のみこりさしをへてさかるうれ志や  
奥原里親雲上

たどりたすかせのふきまわしく隣咲うめのよほひのしほらしや  
久志里親雲上

てちややうたしつれてはるの山川にちりうかふさくらすくてあそは  
備瀬筑親雲上

初春にかれははなのかけたをてそてにまほむうつちあそふうれしや  
渡嘉敷通睦

さかつきはうけてむかしもろこしのたのしみのなかれ汲かうれしや  
伊是名朝直

はなもちり飛ぶてかやうたしつれて暮てゆくはるのにほひうつさ  
恩河朝祐

新玉のこしやたるもろこひのみまゆうちむらきあそふうれしや  
眞榮城守候

はつ春にかれはうれしここのせてひきゆる三味線の音のしほらしや  
渡嘉敷通睦

長閑なる美代のはるあせにひくふへこ三味線のたこ乃志やらしや  
上江洲由恕

うめ乃をあそみやみやまうくひきの晴間あいぬあめのたどりあたら  
春やはあさありてかやうたしつれてあそめやあそそもち延はあ  
佐久本喜章

そくら木の蔭にうちとらてあたる友のここの葉やあそひのよやひ  
佐久本嗣順

梅も匂志やらしやあたらひもあそめあそそらてあそめゆるはあの木蔭  
祖慶筑親雲上

春のそらやあそかあそみてもあそらぬすみてるつきや美代のあそみ  
松島里之子

眞すたれをあけてなあめれを梅乃つきようちわらてよやひ増ゆさ  
本村朝昭

てるつき乃あけもそくそあ乃あそもこもようきやあゆるけふ乃空や  
當銘里主

露乃たまあそみうちわらてあそ乃咲出たるすかたあそもあそやらぬ



小那 朝親

護得 久朝良

讀人 しらき

とらてふもみれをくれる日もわすてあそびのふれらぬはな乃木蔭  
垣やひきめてもよくれあひぬものや隣きくうめ乃志からしにやひ  
夜明あらくこにそのまきうちにつゆあみて咲るはあのみきよらき  
打わらて咲るあさあや乃をあにつゆのあたまのあゝるきよらき  
にしきうちまじりにはのまじうちにつゆうけて咲る花のきよらき  
にそのまきうちにつゆ乃玉うけてあから志立るはな乃きよらき  
あき日きすかけに打わらて咲るあろくの花乃にやひ乃志はら志や  
みれえうれ志きやよは乃まきうち露ふくてえな乃咲るきよらき  
あきここにみれえつゆうけてえなのうちわらひく咲るきよらき  
よむの間のつゆようちわらて咲らあき日きすやまのはなのよ志き  
夕間暮のそらにほほのあひぬあれはよえよさくえなも誰す知ゆあ  
たみあ志あやゆらいつよりもまきええなの影うつすつきのきよらき  
あゝぬなゝめたるえあのたもかけやてるつきごゝもにやこにつれて  
西さかるてもしはしまちみしやうれあかぬあかめゆるはなの木蔭  
たしむ日やつみて夕間暮にあれはあきやしのかれゆかはあの木蔭

千ごしへるまつもめくはるくれはみごまきそへて若くあゆさ  
ゆき志もの降てもかわることなひさめ常盤あるまつの千世のすかた  
はなの下蔭にあそびをみなれえあきやあわすれゆかはるのあこり  
あきやすかあにはの青柳乃あきにくれてゆくはるやつあきほしやの  
咲くはあのかけに行通ひくあそふうくひあこのあきほらしや  
いつもはるくれえ深山うくひあのはあの上に来あく聲乃しほらしや  
ふゆるはるさめに野邊乃百草もみごりさしそへてさかるうれしや  
みごりさしそへる青柳のいごにつゆのしらたまやたかすぬきやか  
あかめてもあかぬ野やまうちつゝきみごまきしそへるはるの景色  
すみてなかれはるはるのやまかはにちまうかふ花のいろのきよらき

夏

神 村 親 方

天宮 城親雲上

宜野 灣王子朝祥

小祿 按司朝恒

中城ハンナ前節

金武節

こはの葉さやまかもてあ志のたしやあつさすたましゆる玉の團扇  
あやせんさらくごたてるたごきけはすゝしさやあつの暑さわきて

久仁屋節

たかすもてあちやか手ふれし扇子や暑さすたましゆる便りかこす  
あつさすたましゆる手になれ志扇子たかすあつけたか、せのやこぞ  
讀人しらす

白瀬走川節  
本嘉手久節

湊ッリ節

稻マッソ節

作田節

久仁屋節

通水節

湊ッリ節

春すきて夏にたちかへてさきゆるでくのくれあゐのえなのきとらさ  
夏くれのすきてつゆのたまむすふ庭のなてしこのはなのきよらさ  
春のはなそめのそてやふまかへてすた／＼さきちやるなつのころも  
手におれしあふきの風のおいぬあれはいきやあ忘れゆか夏のあつさ  
ほはあ咲出れはちりひちもつかぬしらちやねやあひきあふしまくら  
夏の日のおつさあまりすきら、ぬあかれみつたてすたまほしやの  
あつや山かわのおかれみつたてすたまほしつれて互にたまほしやの  
若あつかあれはこゝろたあきてたまみつにたてかしらあらわ  
若あつかあれはこゝろたあきてたまみつにたてかしらあらわ  
あさにたごたて、ふたるあつくれも今やうちはれてたのてゆき  
護得久朝常  
ねや入れわらへすたまほれしちゆてまや又あつさのこも鳴さ  
比嘉統亨  
一寸もあたごきもはあさらぬものやあつさあたましゆるたまの團扇  
富永實文

なつの日のあつさ與所になち行す手におれしあふきのあさけさらめ

仲尾次政模

池のたまみつにかけうつち咲きやる蓮のはあみれはあたくあゆさ

仲尾次政昆

さやかてるつきにあかれ舟うけてあまでのかれらぬ那覇のみなご

松田賀烈

あつも與所なしゆさ浮世名にたちゆる數久田ごゝろきの瀧のふもご

外間現敬

てかやうたしつれて野ま出てあそは今日やあつくれもはれてをれは

上江洲由具

かんあたしやあるあまつのした蔭に清てなかれゆるたまのあつみ

仲尾次政雅

てかやう思わらへ野邊にさく百合のしほらしほひ袖に移ちあそは

高良睦喜

なつやこまをこてあそて暮さなや平松やこしあてあつみまへなち

渡口政發

なつも與所なしゆさ千こし経るまつのしたになかれゆる玉のあつみ

比嘉賀慶

花城故康

讀人しらす

はなそめのそてもぬきかへて今日やわかれとるはるのなこり立さ  
 せみの羽ころもやむごなみにきちもきもやはなそめのそてまのこて  
 若あつやあごひてちやうたしつれてたまみつのかかれ波を海そは  
 わかあつかなれはせみの羽ころもにぬきかへてこゝろすたくあゆさ  
 わる夏かおれは童子やこゝもにたまみつにたりてあそふうれしや  
 はるに匂すたるはなの下かけやわかなつになてもわすれくれえや  
 すた／＼こふきゆるわかあつ風の風やひつもわあそてにやこゝ吳らな  
 せみ乃羽ころもにふりかへてけふや心た／＼こなるあうれえや  
 わかなつかあれを野邊のもゝくまの押かせになひくはろ乃きよらき  
 夏乃日のあつき走川まなかちこゝろすた／＼こ遊ふうれえや  
 かつ乃走川ますゝえおせ立すもえかみつかみのあきやあらね  
 いくこえをへてもにこまなぬも乃やしらし走かわのみつのかゝみ  
 ふみえらち吳たる昔覺へ出しゆき夜半にこひわたるよそのほたる  
 つきもひりきかゝふける夜のそらまこゝろあゝら庭のほたる  
 たちとやひみれをほとあ咲そろてたえかせよあひくはねのきとらき

謝敷節

みれはうれしきやこゝろあし田の稻のまたまとりまさ粒のきとらき  
 見れえうれしきや世あやとの稻乃うちあひち／＼あひちきよらき

● 秋

あきの野にのゝあうくひすのふけるるのたもあけのゝこゝをため  
 名にたちゆる今宵くもりあぬぬれをみつもまた鏡あけのきよらき

尙 穆 王  
 尙 育 王

中城ハンタ前節

中城ハンタ前節

恩納節

久仁屋節

久仁屋節

平敷節

押あせもけふやこゝろあてさらめ雲はれてゝらあつきよらき  
 舟は棹をしてつきにうたうたあてあてたもえろさ那覇乃みあこ  
 くも霧もはれてつきやすみよし乃浮世名にたちゆるあきの今宵  
 ひそくみちとこゝ見るやこもきとら内兼久やま乃えきのもみち  
 てるつき乃あけにいろやますゝみゝかあれて咲る菊乃きとら  
 ああひせんはこゝろつきやけやひみれには乃白きくの咲るきよらき  
 紅葉ちりうかふあきのやまかはにしからみよたてゝあかめほしやの  
 月やあまこまにあかめてこ見きやるうきとすみとこのあきの今宵  
 あきやいろ／＼のきくのはなさかりにしきうちまじり咲るきよらき

神村親雲上  
 宜野灣王子朝祥

みしらふやあれにいろくの花乃つゆにうち向てわらて咲きゆす

浦添 王子朝燕

花乃そてかへちにやへもうち招けす、しかせとひゆる野邊のす、き  
たごむくも霧のへたて、もつきのたそむあくされれもこのひか

屋比 久朝儀室

中城ハンテ前節

思なしかやゆらけふのつきしらやゆつとまもまさてかけ乃きよらさ

小祿 按司朝恒

節やたちかはてあきこてやりゆゆかあつとまもまざる晝のつさ

具志 川親雲上

たのもえやもこのむかりくもらさぬたすかせにみかくつきのか、み

喜屋 武按司朝救

誰ようらみこてにはのくさの葉の蔭にまつ虫の夜々にあきゆか

豊見 城王子

あまりこく鳴な野邊のきりくもまざるわかつらさ知あしちゆて

城 田親方

たかすたごたかくものごひ御衣やそらに一塵のほごもあいらぬ

川平 親方朝範

(伊江親雲上父)

田舎やま國もさやかてあわたるつきにさあこのあけやあいそめ

豊里

讚人しらす

中城ハンテ前節

月も照きとらきいごかまひれ童へつゆのたまむろてぬきやいあそは

きやかてるつきにさそはれてわ身のあめらんごもて出ていきゆん

名またちゆるけふや月あけも清さたみ里とさそそあめほしやの

てかやう押列て詠めやいあそはけふや名にたちゆる十五夜たゆもの

老のしからみかきくのしたつゆや寄るごしごめてわかくあゆま

節やたちかえてあきになてをすかあき夕はあきらぬたまの團扇

秋風のためはのかそさうよめあやうるあつさすたまあゆる玉乃團扇

てるつきまみかくつゆ乃しらたまや青柳のゆごにたかすぬきやか

はら葉またきゆるつゆ乃玉ごごにひかまてあうつる十五夜御月

なかめれはそらやくも霧もはれてさやかてあえたる十五夜たつき

うれ志ご菊乃をなまやごあゆるつゆの玉みらくつきのきよらき

秋ごごみれにはのませ内につゆうけてさきやる菊のきとらき

秋のもくさの紅葉しゆる中よりあわらて菊のさきやるさくらさ

あきのさひしさも忘れゆさやこのうれしごさくのはあのみほひ

久仁屋節

吹廻るくらすのせとつれて軒まきく蘭のまほひ乃しほらえや  
はるまあやまれるもみち葉乃にしき雁のこゑきこあきやしゆる  
ゆりあけのそらや雲霧もはれてすみて照るつきのかけのきよらさ  
この秋や君あうれしこきくのつよりもまさてさきやるきよらさ  
きく見えちもころわあやこの土産にあたらはあやも一枝をたる  
虎頭山出るあきの夜の御つきくもりあいな美世のまみさらめ  
名にたちゆるけふやいつよりもまさてみみてりわたる十五夜御月

渡久山里親雲上政規

あめほしやあものいろくの菊のをあ乃咲頃やしらちたはうれ  
又吉全道

はあのかれあゐのいろよりもまさて深くそめあちやるあきの紅葉  
今歸仁朝敷

くさの葉のつゆやたまご思あきやさいつの間になや又あきやなたか  
夜明けしらくごつゆにたまかみてにはの朝顔のさきやるきよらさ  
護得久朝置

つきもなかみれはあわれさまくの思こまざる旅のそらや  
富盛按司

なれぬ與所島もなれしふるさともそらにてるつきやひごつやすか

佐久本嗣順

佐久本喜章

本村朝昭

護得久朝常

大田朝明

護得久朝惟

城間恒模

仲尾次政昆

あつさすたまちやる手に馴しあふきも與所になち暮すあきになたさ  
幾ごしよ経てもかわることなほさめ天のかわつたるほしのちきり  
あさ夕そて飛ちあふたるやまのかせも身にしみるあきになたさ

名にたちゆるけふや雲霧もはれて照りわたるつきのかけのきよらさ

上江洲由具

なつもは心すきてあきになてをすか手に馴しあふきはなし苦しや

岸本賀雅

てかやう思わらへなみのうへのほて天の河わたる美屋をかま  
たもむ中巻にまちこめてたゞくあはれしるものや夜半のたつき

比嘉賀慶

さやかてりわたるつきにみかゝれて薄葉にかゝるつゆのきよらさ  
新西吹つめてはたさむくなれはころもうつたごもしけくなゆさ

徳田佐平

たきて見てわらへにはの朝顔のつゆかみてさきやるはなのすかた  
誰ようらみこゝ野邊のきりくゝと夜々にあちあき浮名たちゆか  
たみわらへつれて浮世をみと志乃つきとまちあねるあき乃こよむ

仲尾次政雅

月あけまた心もたもむまわみよ乃るあきとあきとまねき吳をか  
あかめてご知よるあきこゝまきくのはなご樂えたる人のむかし  
心ごかまひれ童へちりごゆるもみちぬきごめてあきの名残忘ら

松田賀烈

てあやう思わらへ月見志ち遊えあねていくましゆる十五夜たひも乃  
まを乃志らきくのうちわらて咲きよひふたる雨のあきけさらめ  
めくゝ秋くれはたせせごつれてごむわたる雁乃あたるきとらを

外間現敬

庭にちるもみち心ごにぬきごめて暮て行くあきのかためたらよ

花城康故

てあやう思わらへ暮て行あきのちりごひゆるもみちぬきやひあそは

名城嗣利

える乃はあこゝろあかぬなるめとああきのもみち葉のにしきとらめ

佐渡山安豊

あきのもみち葉の二色とりまきていろくゝの菊のさきやるきとらを

城間恒久

てあやうたみわらへ波乃上にのやつき見志ち遊は十五夜たいもの

山城宗蔭

あふめてもあかぬ清て、まわたるつきあけにあひく野邊乃あき

謝花寛徳

えたれ巻あけてあかめれらわらへには乃もみち葉乃盛りたいもの

●冬

義村王子

える乃初はなもあきの夜のつきも忘るあめゆるゆき乃きよらさ  
向てきゆる年やとかやてやりゆちゆて笑てなめゆる雪のきよらさ

喜屋武按司朝教

久仁屋節

冬にのかえらやはあのちまこひゆるもあま雲のうちえるやあらね

玉城親方朝薫

とるごし波のあさきよみれえなまこもごしの渡中わた

大里眞喜屋

子持節

たるとうらみこてあきゆるはま千鳥あわぬつれあさや我身もこもに

小橋川筑登之

時雨ふる間ごみつやあみたちゆるはれてきめかけ乃うつてみゆ

漢那親雲上庸森

百歳の渡中しからみはたていつもごしあみやよらぬあらあ

讀人志ら

ごやかくに浮世わたる身あふねにのどごしなみのしけくたちゆか

ごめてごめらぬ老のしからみも明日やはるの浦ごしゆんごめえ

恩納節

久仁屋節

ごしや名護あらごんてや聞く首里ご名護境にあさかいうへらあ  
ゆごにぬれよて貫ごめてみほしやさらごたてるたま乃あられ

揚作田節

子持節

久仁屋節

1そ乃くはの葉にさらごたてるあられよねちらすごしやよかや  
きあみのたてはのかやうはま千鳥うらみあく無藏やわめてをらね  
えらつゆのたまごけふやはつしものくきにたきかわて冬やきちやる  
あきあきてふゆにうつていくきくのくれあゆのいろやあの名残  
天の御きためやかわるごさあきめしくれくもわたるふゆのはじめ  
七重八重かけるよはのくほかせに時雨ふるごきやたまのたれ  
旅立乃えくれぬなけなやらちしらぬ名護羽地やごかしちやら

護得久朝置

ふゆ乃しらゆきのいろよ紛れてもかくれなぬものやをなのよかひ

伊是名朝陸

えつふゆのそらの霜ごたみあきやまのころしら菊のえなのすかた  
暮れていくごしもしらあてなしの手毬うちあそふはるごまちゆさ

與那覇里之子

ちごり鳴わたるごひのつれあさやなれぬ與所島のふゆの夜半

池城親方

けふのよまなくひやたしつれてはまふれ暮てゆく歳のあこりわすら

護得久朝常

つき日はひすきて一夜へさみたるごしの中かきもこよひあたさ

本村朝昭

新城安規

小那爾朝親

多嘉良親雲上

花城里之子

伊是名朝陸

護得久朝惟

仲尾次政雅

佐渡山安豊

一年よつもる世話もよろこひも一人のたいくまや夜や明も  
よきちたしまらねをしむこまつきの入相のるねま暮ていきゆき  
うれしさや今宵ゆきもふりまきてこしとこしみたるたよりふたき  
年のあすまでたこなはしやまゆたるわらへしの眞時いつもあらし  
まくらそは立て一人ねのそらにきくもつれあさやふゆの夜あめ  
いろくろ木くさふゆかりまゐても千代のいろふくむまつの美さ  
草からすしものふゆんでこいふすかにはやしらしきくのはふのさかり  
木枯のかせやきくのうへやふくふすき去しあきあつたみたはもろ  
さのふけふよこのはいなあきもすきて木くさ清はてるふゆまなたの

しもごたみなちやさのころしらさくのはのまし内にわらて咲す  
世界や野もやまもしもに枯はて、かにもさひしさめふゆのけしき

高良陸輝

心あてしもやまけくふて呉るなにはやしらしきくのさかりたいもの  
そらや雨はれてくもさりもなぬらぬすみて、りわたるふゆのむつき

仲尾次政模

咲き残るさくのいろさよらきあものひまふち御目かけれわ玉こもね  
千草かれはてる野邊のさむしさや夜あけしらくもにまつのはらし

城間恒謨

あにもさひしきめにはの竹の葉にしけくたごたちゆるはんのまくれ  
禁止やまたならね可惜わかにはのみち葉よちらす無情のあらし

山城宗蔭

の、にくさあごてあたかもみち葉も吹散ち呉ゆか無情のあらし

仲尾次政昆

水草ふれはてるゆきしものふてもごきはあるまつやもごのすかた

比嘉賀慶

くさ葉かれはて、かにもさむさめあつきのそらの野邊の景色

徳田佐平



富永實文

花城康故

波口政發

ゆきまもに野邊のくきやかかれはて、そらにありあけのつきこのころ  
雨はれてみればきやあてつきのしもの上につるかけ乃きよらさ

比嘉賀徳

あきや暮れたまか素立たるきくやのこてはつふゆの伽にあゆさ  
佐久本喜章

浮世すみよしのまつたいんす冬やあらしふくたご、朝夕きちゆる

戀

尙瀬王

あけよこれきやまゆか漕みちや知ぬ深海のりちやちやる戀の小舟

與那原親方良矩

仲村柄節

述懐

仲村柄節

與所めはちしちと思ぬふりしちゆるわをられめ戀路ごしやよても  
戀路わすれよるごしやあらしゆるうらめしや義理の我肝せめて  
むかしなりそめ乃はなものかたは與所にき、なしゆる年の恨しや

干瀬節

仲村柄節

仲間節

干瀬節

長伊平屋節

仲村柄節

述懐

大工廻親雲上安祥

逢ぬ夜のさきこくあひやいみれはごてもなしほ志や、吸ぬむらじ  
浮世自由あらぬわをらんでまればつめてたみまじゆる縁のつらさ  
宵もあかつきもふれしたもかけ乃た、ぬ日やないさめしをやの烟り  
こ、ろあてしなし空曇てたはうれしふあごてら夜半のたつき  
忍ふ夜やつきもこ、ろあてたえうれ與所忘れて浮名た、ぬここに  
逢ぬ夜のつらと與所に思ふちやめうらめもこのふ戀の習や  
ふらえふれ無藏る戻る道からあめやふかかきたよりたゆもの  
旅やこのねさめまくらそは立てむかし思出志ゆる夜半のつらさ  
あまかこまこもて啼らてやまこめはわかれこるわ身やとく乃くつさ

散山節

述懐

仲間節

全

布なさぬうちにあきやきりくすあきやんでやりたををつあき吳か  
浮繩ご八重山縁乃ごをえてたもあけのた、は互にひかあ  
無情の山嵐やたるにた乃まれて我肝あまじゆかあさもゆさも  
袖合ひくさきやきやあらんま、ゆきりたので浮世くらさとりも  
約束のあてごねやの戸はた、くたあすてやりゆや二人まぢゆめ  
乃かすごくわ身にももの思はしゆと與所もあかめゆるつきごやあ  
浮世かたをみに志乃てあかめゆるこ、ろ志るものやつきごふたご  
むかし匂すたる深山うくひす乃なきこへわすれためはなのあるし

平敷屋朝敏

述懐  
下句ハ妻ノ詠歌

啼ぬたみわらへたかさよはれか夜々にふく我身よまかちくいらな  
ゆめに無藏たそはならへたるまくら吹よたそまらあこひのほらじ

豊見城王子朝長

春のはつさくら秋乃うすもみちなるものやあひさめあれかすかた

義村王子

干瀬節

ひきやこるあれに縁のはしかけてなきけかよはさな戀のわたり

手まぐらのなさけつともはるこも今につらき身はふゆのくさ葉

つめて覺出しゆさゝやかてるつきに一夜かりそめのはなの色香

かたらても互に心こ葉やのこてこむしあかつきの鳥もなきゆさ

夜々に手まぐらのあれしたもかけやたつれて吳たか旅のそらに

惣慶親雲上忠義

干瀬節

沙汰るまぢくゆらねふる目もきめて傾きゆるつきこ伽にしやへる

ねてもたもかけ乃わすらゝぬ故こゆめにこへたて、浮名たちゆる

心つもさくものこよそや思ふしゆら逢ぬ夜の空のまつのあらじ

遊女よこや

仲間節

及はらぬさめは思ひますゝみふけやちやうもうつち拜みほしやの

たのむ夜やふけて音信もあいらぬ一人やまの端のつきに向ゝ

干瀬節

たそてこゝなける科もないぬまくらまかたもかけと夢にしちゆて  
あさましや浮世與所の上やしらぬ我身やこの世界に一期こもて

恩納 あへ

恩納節

恩納嶽あかたさこらうまれしま森もたしのけてこゝるたあさあ

神村 親方

干瀬節

むらしあかめたるなみの上のたつき今またもかけのてりよまさて

北谷 王子

干瀬節

浮世あらひこもて無藏もこちあこに百名立よりもたみの苦しや

美里 王子

朝日さすかけのちりのこふここよ我肝あまかこゆる縁のつらさ

喜屋武 按司朝教

義理のせめあはもいそきくちはて、我かまゝにあゆる浮世あらな

宮平親方 良綱

述懐

義理こもて戀路わすられゝらや乃よてふみまよて浮名たちゆる

浮世ならはしの戀路たらやすかのかたまゝあらぬ二人かあゝや

宜野灣 王子朝祥

たもひ身にあまてちちやつくさらぬあはれ口無のはあよむかて

しのふるよひ路もたへてをる中よのかまこくゆめ乃しけくみゆか

仲村柄節

仲村柄節

全

全

干瀬節

小橋川筑登之

ゆめ路かとはしゆる仲島の小はしさめてたもかけのまきてたちゆさ  
わすらてやりすれえゆめや橋かけて夜々にかよはしゆる縁のつらさ  
つくくご獨いむかしたつねれはあつかしやとらぬごごやあか  
あふらへてをためいくご志をへてもわすらぬもご乃えあのみすかた  
まならぬ戀路ふくふみまよてものよたみつくすかたもないらぬ  
逢ぬ何かつらのやみちふみまよてつきまぢゆす無藏ゆゆめに見たふ

諸餽節

赤嶺親方

傾ふきゆる御月しはえ待めえやうれたもひある無藏山路たはもの  
自由あらぬものこのよええの頃に生れこて朝夕我肝やきゆか

久仁屋節

高宮城里親雲上

逢ぬもごる夜乃野邊のをあすき無藏かうちまねくそてごもて  
吸ぬものごてゆめや夜々ごにそてごひきをこすえあのわらへ  
あふめれは誥てたもごごま志ゆるごてもかきこもれ夜半のたつき

垣花朝完

伊野波節

板良敷親方

はあやさきすれて黄葉になるまでもかわるあを互にもごのころ

述懐

小波津親雲上

全

津嘉山親方

干瀬節

全

述懐

阿嘉山筑親雲上

あほ見ちもあれかえらぬあや我肝ごご葉に出ちいやらぬたもひ  
ごても思切はまなごめ二人一期義理の上にとらすごりか

述懐

仲間節

散山節

たもひこかかれても自由あゆめやすあひきやあ朝夕拜みやしや乃  
清わたるつきのかたふきゆるまに引されてゆゆる戀のやまぢ  
忘らてやりしちも朝夕たもかけのたまさきりく目乃緒をかて  
ひきやすわすれゆか朝夕たもあけのうちむある方にまさてたてえ  
ゆめにごごかたえわあらてやごしちも難面やねむるひまもあいらぬ  
かねてからふかくた乃てあるかあやいろわけてめれ紺屋のあるし  
まやへもたごたて吹つめれ新西まれに振合ちゆかたるごよひ  
ひきやす渡よかやあみかせもたちゆひふかみのり出ちやる戀の小舟  
まあらぬ世界にたもかけやのこち行衛あひぬ人ごもらめしやる

干瀬節

全

たよりかせあててほまこまのこもゑらち聞ほしや、濱の眞砂  
あたらえあやすかまし立ることのならあしゆて朝夕かせにもまち  
義理もふみたかぬしあさけもつくち浮世わたゆをこ人のかなめ  
あさけより外またのもしやなひさめつくく、浮世たもて見ては  
かわるあよ互に契るいこはのよほひ身にふかくそめてたきゆて

本部按司 朝救

仲間節

全

こひごりのつはさ借れは夜々こごよかちむちの空や我自由や  
たもあけ乃たひんた、ななき吳は忘れゆるひまもあゆらや  
そらに吹すきるあせたいんたにはのまつに音信もある世や  
思きやけもしらぬこしの寄てわたる仲島の小はしひ乃ちさらめ  
浮世なれそめのわかこ、ろあけあまつかもてあまゆる年のらめしや  
こ、ろあてふくあたもかけにたいんたわきも夕間暮のまつのほらし  
ねきめたごろきにたかそてそごめにはに咲梅乃しみらしにや  
こしのよられ、は思出しもせれらつめてあたらたる人のむかし  
こもになかめたる夜半のたもかけやひつもありあけ乃つきにのこて

仲村柄節

全

一期このこごい夜々の夜々ここに畜生けな我身やつゆにぬらち

全

ひあむかしなるひあはれあたらたるなれあこごはのくたぬうちよ

全

一期このこごい夜々の夜々ここに畜生けな我身やつゆにぬらち

全

ひあむかしなるひあはれあたらたるなれあこごはのくたぬうちよ

述懐

大宜見親方

仲間節

しはしめたごきもわするまやあいらぬかなしたもかけご一期つれで  
あきけたもよらはちきる言の葉のうらやも與所にしらち吳るな  
與 世田里之子

美里 王子  
恩河 朝宣

述懐

あひくあやう與所乃袖ごやいひきも一人かひこご葉のくたぬかき  
仲 程 良 恩

干瀬節

いふなうきつらさかきねても我身の、よえあた心無藏にむちゆあ  
里あ手になれしはな乃したひもやひくはるにあてもたかすごきゆか

金城 朝眞

一本ニ豊見城親方

一本ニ恩納ナへ

浮世ならはしのことちたらやすかのかやうま、あらぬ一人か中や  
思ぬゆへからご覺出しもあゆる我身やたしゆの間も忘れくれしや  
瑞慶 寛昌 綱

仲間節

ふられゆるわみにのきてたもかけのうちむかへく、そてにすがる  
たもあけごあごまつれるあわれさにつ、めかくさらぬそてのなみた  
よひのまや互にそてをかさへてもわあるあかつき乃つらさためは  
我が身ふりす、たもたすかごああれやたたもひ磯のあをひ  
あみにたごそへてたるよあゆやいなきゆかはれ仲島のうらの干鳥

仲村柄節

仲間節

全

しなさけと頼むたるか上にあてもわをれてやりいちも思ふたきゆめ  
日々のおこなみよつあかれて我身の拜みほ志やあても自由もならぬ  
露たいんすはあにこゝろあてふゆい人にしなさけのあらあたまきゆめ

田里親雲上

全

をきと身にゐしてやくとまもまさてかあふやかれのもゝの苦しや

仲順親雲上

全

思切んすれは無藏かたもかけのたちまさむく目の緒さかて

伊舎堂親方

仲村柄節

干瀬節

あらあふくくるのはあの上のつゆいうちふらりくまほひもすえぬ  
あかめれはつめてたもひ何あけのつきにてままさる無藏かすかた  
まゝあらぬものやこもちさめひこの義理やそむからぬうきよやれは

久志親雲上

いろまあらはれて落らねそのよて與所のさかめゆかそて乃あみた

國頭親方

たもこころあても與所にかたられめたもかけこつれて忍てをかま

兼本

目にもみられらぬ手にもこられらぬかあしたもかけやきもにすかて

豊見城王子朝尊

古波藏親方

みゆるものやれはこやいすくとすかきもにまぐさよりあれかあさけ

訪諏木工右衛門

うらめしや義理にとらぬこしよらち手こてひかれらぬはあわらへ

宜保親方

はあも世のあかや自由あらぬさらめあらこ吹く夜やつゆも吸ぬ

盛島親方

あれしたもかけや旅までもつれて夜々ま手まくら乃ゆめのつらさ

喜屋武親方

ゆめに無藏御働たそてたもかけの目の緒たつなみに我袖ぬらち

浦添按司朝英

浮世くさ葉乃つゆこゝろやすましのふもたさきも自由もならぬ

神谷厚詮

鶴に鴛鴦乃たもひ羽つけてあき夕つゝまれてくらしほしやの

邊土名親方

あさけあてふくも野邊乃えあまき二人かたまたまの緒乃たさきあは

たもひある中や野邊のくさやこにそてしきも二人ねらあをきゆめ  
一人ねの空やあかさらぬあてこらめたるこりのはつ聲まぢゆる

美里 按司

江洲 親雲上

さまざまに獨りいらぬことまでもたもひみたらしゆる縁のつらき  
まくらあらへてみぬかものかたり夢もてきちやめ御きもかわる  
約束の誓やたからはぬえより罪乃無藏か上にあらはきやしゆか  
内間親方 良經

何さましや浮世いつもこの心ろいふさけないぬ紺屋にたのむかあや  
渡地乃うらやいつもなみかせかつなきをくふねのをてもつかぬ  
玉川 按司

渡海の上に我身や浮く舟乃ころころこれこてまぢゆるかせのたどり  
漢 那 庸 森

ぬらす我かそてやくもの葉もあらぬ夕間暮にあれはつゆのやころ  
思こころやはしらそて眞帆かけて戀のせめもせこつれてゆきゆき  
ぬきやからは浮細いりきかて八重山互もかけやつきよてらさ  
けふのつきあらに針乃糸かけてあれそて我袖こめてみほえや  
あみにもまれゆる浮舟のころ我身やこまあゝい捨ていまいぬ  
きやあらせんこもて戀の深山路にふみまよていきゆるはてやしらぬ  
玻名城 里之子

山里 筑親雲上

仲尾次筑親雲上

こひ乃いごなはよつあかれて小舟浮世わたりちの潮こき忘すて  
いきやかあていきゆら果やしらあみにぬれて漕わたるこむの小舟  
鳥たいんす人のしあきけのいごにつあかれてなれる浮世やすか  
與所やあみたゝぬ浮世なたやすくわたたのえみゆる戀路やある  
こやむすてらなや夕間暮こつれてたゞくやまてらの鐘のこもく  
高原 里之子

當間 筑親雲上

豊見城 親雲上

新西ふく夜の一人ねのそらやたしむあもつきのこりこゑまぢゆき  
あみあれてさらめこひの舟橋もるけてわたらゝぬ縁のつらさ  
辻メイフツノオト

讀人 しらす

我が思ることに里かこもためえいやりきぬほてもいまひらやする  
たまこかね無藏やみつの上の御つきをかみつめあけあ自由もあらぬ  
こかくまゝなゆるせつもあらやすかまぢかねるつきひ思のくれしや  
仲間節

一本ニ眞喜屋親雲上

仲間節

かよへみる自由のならぬしゆへ互に節まぢゆる間の思乃くれしや  
 ふやかれてをてもしあさけや互に通はらせつともまぢゆるやすか  
 義理ごもて里前せつよまぢめしやうれむすてある縁のたたにあそめ  
 義理ごうらめゆるあさけわれれよめ縁や通をちゆてせつごまぢゆる  
 まゝならぬ戀路ゆめにかとほさゆてせつごまぢかねる縁のつらき  
 義理やくれしものあふぬいきわかれ便りあてられよいやりあ  
 つれなさやゆめの世のなるにをこて朝夕義理の上にもおくた  
 義理たのてわたる浮世しりあけあうらめゆさ互にこおのあらひや  
 何ぞやんから浮世義理乃あぬわれは二人まゝあゆる戀路やすか  
 思ぬゆへからご義理よごよるかくれやえ路のあらあたまきゆめ  
 こてもうちころすまゝあらぬ世界に一期義理たのてくらきよりか  
 こてもうちころすたしむ身やあらぬ一人こかれこて思をとりか  
 まさる花やははらて吸めしやうれふられゆるわみのうらめゆか  
 浮世のあごもて我自由せんすれえうらめしやくたぬきりの責繩  
 戀路は志めたるひごうらめゆる義理の責繩やごかあしちゆて  
 約束やしちゆて無藏まぢゆるよるや花のつゆまぢゆるんかあゆら  
 高はしりあけてさごまぢゆる夜やはなのつゆまぢゆるかよあゆら  
 路端乃ささや與所の上よすかる我身やさしなや心里よすから

仲間節

干瀬節

闇の夜のからすなかぬもの知れぬやなしゆてうらみ無理やあらぬ  
 はあごしあけなごうつくしゆすもごきの間の縁のくらさあてご  
 怨みごごあれにいやなまぢやりすれば切てさめ御縁御行達もすらぬ  
 きやあらはもごもて捨ていく我身よ乃あゆいごごはに情けかけて  
 思切めさご前たご信もあいらぬるくれほそ路乃くさ葉あらぢ  
 捨よりはごてもたもかけもごもにきりて何ごかけもたゝぬごごに  
 我みたもる無藏よたまぬむくひかや我か思る無藏やわみやたまぬ  
 見る方にうつるはあそめのやからいつあごりしめて我自由あしゆる  
 なまけ思えらは我かなもらあなやう與所しらぬごごの戀路たごもの  
 たごご與所つれて遊はもごたじやにやひごも與所にうつちくいるあ  
 袖合たるむつれ與所のいきやいやをもあたるあいくつあ儘ごやゆる  
 むすふご縁乃むかしくりもごち今よなしややゝそまの眞砂  
 御下あ結繩のいごごあゆんごごはしごごのあかたごごごごごごごご  
 切ななかたへてまたむすふ御縁かわるなやう互にあのよまでも  
 與所のいきやややはもかわるあご互に與所や花散す嵐たごもの  
 心やあしゆて互に通はしゆるたもひのよてごごもれて與所のしゆか  
 なさけ思よりはわらぬきゆるさきにむかてるたさせやう小灣小松  
 名護の番所たゝいまの羽書我みもたち賜れ我無藏みやあ

仲間節

干瀬節

大兼久節

恩納節

恩納節

干瀬節

大田名節

仲間節

逃懐

謝敷節

長伊平屋

七葉ほし多葉粉かしらこにしちゆて里と原とあまゆきやはたはも乃  
 あれかこもゝゑかわ沙汰こもしゆらは哀れ鳴たんでかたてたはうれ  
 晝やちやうも里とあはるくしゆゝ夜の一才のまやゆるち給れ  
 朝間夕間通てみる自由のおれは見欲やうらきらしやのよてしやへか  
 何さ道かいまひらゆな道かいまひらわみやうじやあ森御待しやへら  
 我身や無藏尋ひ無藏やわみ尋ひ一人尋ひくいや夜や明ち  
 七門越て九門にわあい御待ゑゆすかあまでこぬ里やにや與所つれて  
 島もごなくこつきも山の端に何はれ無藏こまいて鳥もなきやさ  
 夜あらしのたゝくねやの戸はあけてみれば里や來ぬつきこいゆる  
 寝間にむるつき乃我がこゝろしらは戀ゑのふ里とつれていまいれ  
 つきの夜もそるい闇の夜もよるゆ里かまいる夜とにやよるさらめ  
 行もいゑれらぬ居もをられらぬこひの路ゑはにあきとあかち  
 こゝろあてからや海山の底もたつねらなをきゆめあれかゆくゑ  
 なさけ何てたはうれそらしける雨もたまにやくそくの今宵やれは  
 ゑのていくこゝろ與所やしらねこも袖しかほかくす戀の習や  
 ゑのふ何さかくすはるのゑあ笠やそらしける何めのたよりなたさ  
 ふる何めにたよて笠にかをかくちしのて行こゝろ與所やしらぬ  
 逢ぬ夜の笠やいらぬものきらめそらしらぬあめのわそてぬらち

全

出砂節

逃懐

全

仲間節

逃懐

伊江節

出砂節

白瀬走川節

謝敷節

仲間節

ゆきのをあ笠やいらぬも乃さらめあられちるたまやそてよつゝて  
 笠や何めふりのあまゑたか便り我身やたるたどゑさこゝたよる  
 きやあらはもこもてこゑの深山路に踏まよていきゆるはゝやしらぬ  
 ふみまててさらめこひの深山路にむかていくさきのほこもみらぬ  
 暮せらぬ一人やまの端まむかてまちゆれこもつきやあまてゝらぬ  
 きやかてるつき乃あけをうらめたる人のいこゑ葉やあまこしゆる  
 今こ思ゑゆるきやかてるつきのあけをうらめたるおこのこゑ  
 やみの夜の問や我みこまゑををまたまこかね里や月夜まゑまうれ  
 こゝろくらやみやたるゆへにあたか我身や何りあけのつきこやあか  
 にえにてるたつきゑんよてまうつきさこゑほらし御肝わみにうつす  
 笠にちりこまるる乃ほあこゝろそゑに思こまれきこかたきも  
 散りこひゆるはあやいこにぬきこめて里もたもかけやきもにこめら  
 はあこつゆのゑん何たらませ我身乃夜々こゑにた側そやいをらまを  
 あせけあるつゆこはあの上やふゆる眞實の思のあたにあをめ  
 一粒あるはなのゆこにぬかれをぬぬぬこ互にたもてたはうれ  
 花當の里前はあもたちたはうちはなもたさよりの御胴いまいれ  
 はあこまは里前をなもたちたはうれいつまゑもこまは御胴いまいれ  
 里やいきぬれ乃はなこ思あしゆら我身やいつまゑもた乃をすか



述懐

干瀬節  
花風

干瀬節  
散山節

のかすしらつゆやつやてまぢかねるはなの上やふらぬわ袖ぬらぬ  
落て、やりあみた他所にあらはしゆめ袖のしからみ乃くたぬかきり  
瘡もあかつきも思出志こかきりまくらうきふねにあまか心氣  
梅やはあ咲きゆ心庭や雪ふゆ心無藏かふごころや眞南ごふきゆる  
つき見しもあれかはあ見しもあれかたもかけごまさる夜も晝も  
わすれてやまいちもわすられぬ朝夕ふれしたもかけの目の緒さかて  
のよてたもあけやつれてきち吳たか一寸もはあれらぬ目の緒さかて  
ゆきやあわすれゆかすみなれしたそえ朝夕たもかけやそてますかて  
夕間暮ごつれてたちゆるたもかけあさましや我肝これいきゆき  
今日やのかやゆら面影のまさごかくあま時分我沙汰みこやいら  
あそひたもあけやまれくごたちゆる里あれもあけやあさもゆきも  
わぶてたもかけや互にあらやあふくらさらぬあすや一人さらぬ  
夜やゆめしけく晝やたもかけのたちまさいくわすれくれしや  
晝やまつせめてごやかくに志ゆすかよる乃こよあかやあかしかねて  
夢のかそはしあわれたつねらはまたゆめに返事やきかちたはうれ  
面影のたは沙汰よしゆんごもれゆめしけくならはあきゆんごもれ  
夜々にゆめしけくかそはしゆるごこよさめて自由なゆる浮世やらあ  
ゆめやまたあらねまごこもやらえ有りごこの間の由緒さかせ

謝敷節

仲村柄節

本散山節

全

仲間節

仲間節

干瀬節

眞地福ノハ  
イテヤツ節  
アカサ節

仲間節

みごし思つもる人しらぬあはれたまごかねきごよしらせほしやの  
かしらきみたれて誰ちかへもしやへん里をりもほかにきものあらは  
まくらそはたて、きくもうらめしやまらゆるごきまされる鐘のひき  
淺地そめらたも紺地そめらはもさごま、やゆる我身やしろち  
そめゆらはごも小鳥のいろにあきちごもやはゆるちたはうれ  
そめていろつかぬかな乃あめ世界にあきけるてめれ紺屋のあるし  
かねてからふふくたのであるかあや色わけてそめれ紺屋のあるし  
乃しゆあいたつらに色つかぬかあにふかく染らてやりご、ろつくち  
紺屋もき、あごあもたのたあか、あゆへをやたらいろもつかぬ  
かなく、紺屋の染あさんゆへごむちやり別さらぬつくてあきゆる  
ましら葎よさるちたあさん布たらはあぬいろそめれかあし里前  
かあかけて伽やならぬものさらめくりかへし、思ごまさる  
わくのいごかすにくりかへし、かけてたもかけのまさてたちゆさ  
わくかあ乃御あんなたらませる互にくごかへし、切ぬごごに  
をかてなつかしやまつせめてやすかわかて佛のた、はきやしゆか  
ふやかれてひごごごごごご思をよしむ言の葉もあたらやすか  
末吉の開門かねや首里の開門ごも無藏たごちやらち我肝やにゆさ  
ふやふれてあご乃名残あいぬごごにかたらむつくされる戀路やらな

仲間節

逢ぬさきをこてこかれゆる間乃ものたもひてすこひちさらめ  
わすらんてすれはたなさけやふかき思切んすれを思こまさる  
浮世自由あらぬわすらんてすれはつめて思ましゆる縁のつらさ  
のかすこくかゝある我身のしゆる戀や思盡すここのはてもあいらぬ  
るん自由もあらぬ世界やあて來れば乃しゆか世話くこものと思て  
拜まねはのよてこのあわれしやへか引合ちやる縁にやうらみゆる  
かにあんで思は吸なたきゆたすかまよてさめ肝にやうらみゆる  
むとひこちまらぬ御胸やゑらや吸なさをこて心ちやくいらぬ  
御衣かさへしちも思あわぬ二人吸ぬもの、しゆあたもをつくち  
あけやうこれきやしゆか思切やあらぬ引されていきゆき我身の肝や  
捨られてあこのくつさ思より御恩んあるうちゆるちたはうれ  
しほらかこしゆらんで山葉をちちあん袖や谷かはのそこにひたち  
互にかたたらたす夢のまこやすかまこるみゆるうもよさめていきゆき  
あれかひここ葉の心なくちゆんこめはのよてかたらたか朝も夕さも  
あままじやたもひさためてもかわるたのみかたあさや人のこ、ろ  
あさまえやわらへ與所よたてつきやめ朝夕かたらたるなをけわすて  
一期てやりんてやたか始め心ちやかさこやきもかわて與所にあれて  
捨られる我身のくつさてやなかねえゆるかたま乃緒乃たしをあてこ

述懐

子持節

白瀬走川節

述懐

仲間節

干瀬節

花風

干瀬節

述懐

早作田節

干瀬節

捨られるわみのくつさてやたまぬ報をこもあれよいかはきやしゆか  
我がしゆゆる戀や干瀬に打小波をうつきやんこめはのちこいきゆる  
里やありふしのすたごりみしやいら我身やえなさけの縁たのむ  
松の葉に二人ねてもくらちやすかあまや芭蕉芋の葉もしはくあさ  
とる邊あいなぬものや海士のすて小舟つく方たのむつなきたはうれ  
我がえゆるこひやわたし舟こ、ろ一期漕れこて浮世わたる  
あれ、はも漕いそかなてもこきゆゆやあは渡海やれはこかな、とめ  
我がしのふ道に籬たてるやから吹ちらちたはうれこをのあらし  
糸目から針目ほけるこも我身のよて思さこかみこしひきゆる  
隠するななくちもしかしれよらえ心やん一人やなさぬかたれ一みち  
あらはれて、やり里一人なしゆめ我身も、ろこもにあらんえゆるもの  
二人ま、あらぬ世界にをてのしゆかてかやう極樂のはあのため  
わあさひこ、きのかちひちの空や、みのさくへらもくるまたう原  
我自由のなれはあれや自由あらぬのかすこく世界やあにあるものや  
すみ習や妻やあいやしや、あまか殿内つめみつきしまの 一つき  
出てこよやれを知られやしゆすか出てあこ、あやまこかはちゆめ  
たもゆらは里前しまこまいて心もうれしまや中城はあ伊舎堂  
かちゆたる間やあつみつこの、ろのけはふゆみつのみのけたちゆさ

述懐

全 仲間節

あいたあま爪や、てごほれとるやまなあかれとさあれとわみや  
 あへやんから迎ものきゆとまあらね朝夕つらごふしされらとりか  
 ごとになかめたる人のをてからや乃よて、るつきに向てあきゆか  
 たるごふたらてもすみゆる身ごやすかひきやあ肝のそをぬ中や  
 わごやちやうもわごのま、あらぬ世界はあれよ恨るよこのあるい  
 たかむにま、あゆる浮世小車のめくて来る間や、がわてくいるな  
 むねにも思はやたる火のかけも我が身よりひつるひかりごも  
 思ひましまさまたみちやしゆる夜やわらへ聲よだて、あふんはかり  
 無藏やうきふねまわ身やそのいかり縁のつれあきやはあれくりしや  
 るんねく舟の浮る渡海やれはけふやむちをかてあちや、來ゆか  
 わか手引しちやるな、とめごはたいん里あかひす羽御衣よすらに  
 こしごう原わりてはあもゆるをいあこ色美さあす年合の志にやぬ  
 あかつき乃わるれそてにあみたて、仲島の小缸わたりくごしや  
 くりかへちむすふ御縁待みしやうれ染めてゐるがあのあたにあゆめ  
 あかんかりそはひ戸真簾はきてあにほらはもごまを忍ていまいれ  
 仲島の小缸人しけさあものあほらはもごもてし乃てひまうれ  
 仲島乃小堀千ひるもたちゆらたれよりもふかく思てたえうれ  
 はかれても互に御縁てからやいとにぬくはなのきりて乃きゆめ

大田名節

全 干瀬節

全 仲村柄節

全 仲村柄節

全 仲村柄節

全 仲村柄節

全 仲村柄節

全 仲順節

全

全 仲間節

全 干瀬節

全

全 述懐

全 述懐

全

全 述懐

別てたもかけのた、はぬきみしやうれなれ志句そてにうつちあもの  
 てとさよらさあてもさき、よらさあてもたるごあふめゆか月も花も  
 ごきあゆらごもてあふめれは月乃ものごたもはしゆるけふのそらや  
 た、志はしごもてありねしやるやこのはあのうつり香の袖よのこ  
 鳥うたへは里前のかいそきみしやうる別れてやりいちや鳥や鳴ぬ  
 鳥やうたらはも夜やあけてくゆるあまれ乃手枕のかたらひたいもの  
 たもひありあけ乃夜半のつれなさやあれぬ與所島にをてごしゆる  
 旅やごのあれしらすあやあれよ夜々にもよはする夢路たて  
 わかれち乃つめてちかくなてくれえあたごきも御側はなれくりしや  
 あかぬ別れ路やかますつれあさめ朝夕たもあけのひつものかぬ  
 暮される間やまつくらち見やへらくらむあらはごまいてをかま  
 あきゆて恨ても笑てごかめてもあにあるあてあこの知ゆめやすか  
 只んてごしやあかのかやうかになたるまつほたる縁のよ別ら、ぬ  
 この辛きしゆもよやへもをらやあごく、つさあれは一人ごもて  
 せらはたち別ら與所めあひぬうちにかてあかつき乃鳥もなきゆら  
 御衣の袖ごやいわかよしめなけあきやあらをもごもて捨ていまひめ  
 節よまらみしやうれ廻て春くれはうめごうくひすのちきごしやへら

浦添王子

保榮茂親方

あみたまらたまの心こにぬかれ、はあかぬ別れちのかたみえゆきか  
あられこの葉もしもにかはれて、わきもさらくこゆきこふゆる

金武朝穩

たごつれやたへてたもかけや繁くなれぬ與所しまやつらまはかり  
あみた、んここよいつもこ乃浦につぶきこめたかあこひ乃小ふね

護得久朝置

あみた袖ぬらきあかぬふやられのほはれしものやねやのまくら  
浮世小車のめくて自由なゆるせつとまぢみしやうれちきりしやへら  
あかつきのそらにをてる白玉やあかぬふやあり乃あみたさらめ  
さらよ下かけるくるまよりまさてご、めかたあさやこひのこ、ろ  
うき世なみ立ぬしまにこきわたてあかぬたらあや無藏ごふたひ  
かにたしさをひ忍てふやはちやる無藏かてまくらのゆめのゆく衛  
心のるわかこ、ろしあさけのいこよぬきこめてたかあたまの心のち  
切もきれら、ぬごてもものけら、ぬわきもまつほたるるんの小繩

翁長筑親雲上

義理のまゑかきやたもかけもこもにかとはさぬここの禁止やならぬ

惣慶良成

野邊のくさ蕤互にうてまくらあかぬ心かたらひに、や夜やあかち  
わすら、ぬあてごあみあらまあてもこきわたて行さこひの小舟  
無藏かしま元にこきわたる小ふねたもひ真帆かけてしのでつきやさ  
うそて戀忘さやゆめに御行逢をかてまくらならへたる夜半のしきま  
見れはこひしさを平安座宮童のけあけゆる潮乃はなのきよらま

護得久朝常

縁もしあきけも深くそていきゆひいきやかあていきゆら二人が行衛  
互に思切やいわかれゆる渥のよてまた我そてごやいひきゆる  
あれぬ與所島もあれしふるさこもひこのしなさけやひごつさらめ  
ごむたちゆるはへる花のまほきまのくふかまのいごに向ていくあ  
もしか言ち里にふられ、はさやしゆかいこごはにか、る露のいのち  
袖ごやいひくなここの音のこごにひけをあ乃たちゆる浮世たいも乃  
くらやみよやれはしはし待みしやうれ二十日夜の月もやかてごゆむ  
山原ご御國ごかこへきめれいちやもなていまゆらたごもきかぬ  
そらにてるつきやたもひますか、みあかめれはうつる人のむかこ

小那朝亮

こきわたていきゆる果てやしらくものゆく衛きたまらぬこむ乃小舟

親泊筑親雲上

しらぬ與所島に無藏一人やらちもこてこぬ間のたみのくまじや

當間 筑親雲上

新にしふく夜乃一人ね乃空やたしむ宿かつきのこり聲まぢゆさ

仲 眞 良 運

まゝあらぬゆへさわかれやいをまかのよて夢しけくみせて吳ゆか

仲 村 良 常

たかすたごしゆたかをごろちやめわらへ二人手枕のねもこやすか

兼 本 里 之 子

いことはのこごにせつまたんはれば二人さたまらぬたまのいのち

又 吉 全 道

與所にいちいやらぬたもひ有明乃つきにたもかけのまさてたちゆさ

はたさむくなれはあみのよるひるもかあしたもかけの増てたちゆさ

大 宜 味 朝 春

中絶てをすらいやいわなひたのまあき夕はあらぬ沙汰としゆんで

備 瀬 筑 親 雲 上

しのふくり舟にまちゆれこもよすかあはぬあらなみにそてこぬらす

一人くらさらんこご乃いごしめてかきあらすあはれしらなやすか

新 城 安 規

新よしふくよるや仲島のうらのひしたくたごのわきもせめて

はたごるんむらふしらふいごあは乃きりてぬかれらぬ二人かあかや

名 城 筑 親 雲 上

きりてゆくまきにたのむいこごをや與所に我あしきまかたて吳な

眞 謝 里 親 雲 上

たまさかにはなのしまやこきわたるほはれ船つあぐかたもあいらぬ

伊 是 名 朝 睦

芋の葉とうたてほそふたるわぬもこひのわあくさやあまごつたる

夜々にうてかわるつゆたのむえあにぬしゆかさまの情けかけて

本 村 朝 昭

うれしさのうちよ世話あみもたちゆさあれぬえつ旅のこご乃わたり

たまたないぬ蓮のこごろしち互に生期與所きもやもたぬこごに

多 嘉 良 親 雲 上

まゆらし思わらへらんの匂がたてうちむかひくゆめにみゆさ

久 志 里 親 雲 上

與所の目の繁さははしまちみしやうれつきのやまの端に入る間や

池 城 親 雲 上

いく里へさめてもあれしたもよけや一寸もはあれらぬそてにすかて

大宜見朝知

濱元親雲上

佐久本嗣順

佐久本喜章

大田朝明

岱嶺和尙

多嘉良里親雲上

あゝと山原といこのゑんむすてたもむ自由あらぬものくりしや  
あゝと與所島に無蔵一人のこちそてこやい與所の引はきやえゆか  
首里御國人のたもかけこつれてむよゆる芋も放ちたみこしこと  
うきよたつあみよそてやぬれらはんこきわたてみやえや戀のみさき  
聞はわるこゝろひかきれて行きすみるあかつきの琴のしらへ  
ゆめうちにたいんす戀のならばしや袖しかほかくちしのでゆきゆき  
無情のはあたいんす朝夕もてなまははる香彌ましゆる浮世やすか  
つやえをるはあやつゆうけて咲む我身やささをとてあまごさきゆる  
つねにたちかはてたえはよひ増すはつふのしものあさけさらめ  
さちのまじもきのたちゆんてと思はるねて言語もあたらやえか  
こまいて行先やつきかけもくもてこのふ我がすかたらくちたはうれ

今歸仁朝和

眞喜屋實珍

渡嘉敷通睦

保榮茂朝意

大宜見朝昆

田崎朝舉

田崎朝用

小那霸朝親

あはれゆめ内にしのでかたらたすさめてなまゝてもわすれくりしや  
ふやかれるくりしやええあけなわ身にのそてものみかほみせて吳か  
思てをまぬふええらんとてこゝろゆきか覺らすにえさま與所よしれて  
あかぬかたらたる人のたもあけやあわれここの音にまさてたちゆき  
あまから乃先やいきやすくらえゆかやたのむ人も御肝かわていまい  
あよひ路のくさはふみあらえここの與所めしのからぬ浮名立す  
うちとするなみようちよられくつあかたなひらぬこひの小舟  
やかてきゆんこもてまつの下露にぬれてあゝつきのこゝろ聲きゝゆき  
新にしふくかせの身にしめてふけはつめて思まきるさかたえは  
としむここのはや琴の音よ乃せてわそてひくよりも別れくもしや

まよていくさきや梓弓ころひきゆへもらぬうきふたぢゆさ

知花里親雲上

渡りいくら乃なみあらをあれいきやかあてひきゆら戀の小ふね

仲吉里親雲上

たまむわかれ路乃えなのたもかけやいつも明くものそらにのこて

伊集里之子

しほらしもの心聲や海を夕きも我身よさかち焦らしゆる花のわらへ

護得久朝良

夜々に落てかはるつゆのたまもほもた乃みかたあさや人のこころ

大田里之子

さやあてる月もなさけあて二人もこのふあさかけやかくちたはうれ

大里里之子

無蔵ごわかなかやひわあみのこひもうちたきくうきあ立を

我那覇朝周

互よ自由あゆるうき世ある間やてかやうこき出さこひの小ふね

上江洲由具

あはぬいたつらに野邊のくまやこにまちゆてあかつきの鳥こゑ聞さ

ゆめ乃間よ志のふ手まくらにはひやうそてあまもも袖にのこて

やみちふみわけてこまいりわんをらぬ行衛志らつゆよそてこぬらす

佐渡山安豊

わつかゆめ乃間の浮世わたゆんて朝夕さまくにもものそたもて

岸本賀猪

浮世何ここやしのおも無蔵よ與所のくなしゆすやしのひくりしや

神里常德

しあさけの糸につあかれる我身や浮世與所へらひのひまやなひらぬ

渡口政發

無蔵かたもかけや道しるへしちゆて行衛しらつゆにぬれていきゆさ

山内盛燕

むつれたるむかし忘るあやう互にいつもたもかけやつきにのこち

護得久朝惟

かにもつれあそめたもかけこあこりいつも仲島のうらにのこて

夕見ちやるゆめや道しるへしちゆてこまいくに行るささかきみあ

わくの柄よすける眞竹なすたいんす朝夕無蔵たそはよらあやすか

仲尾次政雅

かにもつれあきめうきと漕舟きものかちよるすひまもあひらぬ  
かわるなよ互よいくはるにあてもうめさうくひたのあかぬちきり

仲尾次政昆

のよてまゝならぬ里前けうつち我肝あまかしゆかつき乃かゝみ

花城康故

あけやうわかえてやうらの干瀬こゝろあみのよるもぬれる心氣

護得久朝常

あられちるたまも押はらひくしのてきやるこゝろあたよなしゆめ

たごむうつもれてゆき折やしちもかわるなやう竹のもこのこゝろ

あみのよるひるもたもひまもこひかうめさまつたけのあかぬいろ香

外間現敬

あさましや我が身ゆめの間の世界にあはれたもこゝろ果もないらぬ

夜の更るまでものあをたみ里やよこそれかしちやらあてもあいらぬ

一期てやりこもてちきりしやるこゝろ仇にきもかわる人のらめしや

結ひかためたるしあさけ乃いさやいつまでも互にこかぬこゝろに

富永實文

あはれわかこひや三葉芹こゝろいつもたもかけや三人つれて

あせにもまれゆる心こやあきこゝろまじ立てたはうれがあし里前  
あわるなやう互に幾世いつちやてもちきる心こゝろ葉のくたぬかきり

名城嗣利

あきのもみちはのいろよりもふるくしあさけの心こや染てたはうれ

山城宗蔭

とああしもなひらぬ我かたもる人やあらす三味線乃いこのこゝろ

いつまでもあかぬひよくたし鳥のたもひ羽乃ちきりかわて呉るな

田崎朝光

こひし屋久田港しなまけをかけていきやし塩屋港わたていきゆか

外間正悦

ふやかれて一人いきやすわすれゆもあそひとみおちやるはあの木蔭

安仁屋宗徳

まこととりほるにのゝ契りしやへかあわるあやう里前あの世までも

仲尾次政起

若かあきはてゝかあし思さこにふられらは我身やゆきやかあゆら

城間恒久

いつもかはるあやうまつ乃葉のこゝろくさの影までも一道たゆもの

比嘉賀慶



慶良間渡の潮やかれるこものよて無藏ごわかちきまあたにかゆめ

比嘉賀徳

一人なかめごてそてぬらすたもごてつきの外にたかす知ゆか

城間恒謨

無藏かふつくるや埋火のこころほられちるふゆも與所にかゆさ

高良陸輝

てりきごらさあてもたるごあめゆかたもひ有明の夜半のたつき

徳田佐平

つあくるたあひらぬあけやう、らあみに朝夕もまれゆさごの小舟

伊是名朝直

そらよてるつきもすみてふく笛またもひるとはしゆる縁のつらさ

覺を出ちやまむかし夜半のつきかけにこのてかたらたる人のなさけ

はあの上になそふはへる身のことになたて自由あゆる浮世やらあ

辻トキノマカト

この間や小舟かせまゝになれて今やあわうちにああごごめて

全山舛木ノカメ

またたてゝ置はのよて夜ほらしに吹よちらされかはなのにはお

すてられるわ身のうらみあひぬたきゆめたご打笑て返事やまぢも

花城里之子

筆ごゆるごこのあゆるわごやれはほまた思事もいやいぢゆすか

たもて自由ならぬ人のたもかけののけてのけらゝぬきもにするて

惣慶親雲上忠義

はあも世のあかや自由ならぬさらめあれのしゆる夜やつゆも吸ぬ

神村親方

たもひ身にあらはごこのよしあしもいやなごかれゆめやみの螢

義村王子

たもひあるやごも自由にごて行ゆいのよてごかれごもやみの螢

安仁屋政清

包つつゝまらぬあはれあつむし乃身にあまるやごのたもひやれは

喜屋武按司朝教

もの思ごかれゝは夜々乃やたる火も我も身から出るひかりごもて

大宜見親方

しるごごやたられくさむらのほたるごちゆひ終夜もゆるたもご

渡久山政規

つほてつゆまぢゆるはあ乃咲き出らは句やたかそてにうつち吳ゆか

當間朝宜

我が身しちわも身あか、らち螢やみに身をかくすかたもふいらぬ

豊見城 親雲上

うらめじやつきも山の端に、てたのむ夜のそらやふけてひきゆさ  
たのむつきかけの山の端はいらはいきやすたみくらち鳥聲まぢゆか  
たもひつくさらぬてるつきに向つめて

野國按司加那志

月やつきともて與所やなかめゆら我身やくらさらぬあきのことひ

豊見城 王子

あまりこくあく野邊のきりくすまさるわかつらき知あしちゆて

讀人しらす

つらさ身にあまて夜々よまつむし乃與所に名の立すしらぬあきゆら  
ま、ならぬ無蔵かいことはのつゆにぬれて松虫の夜々にあきゆら  
わえら、ぬゆへさあわれまつむしと夜々に聲たて、こもにあきゆる  
たもひきりくすくさに身はかくちあわれ啼こるやうきなたて、  
あはぬつれなさや野邊のきりくすもよ聲たて、鳴んはかこ  
まさるめは明るなつの夜さやそかむねにも、思は明えかねて  
ろかちたさたかく立るなやう小舟與所しらぬこひのわたまたいもの  
えのかあよ乃とてあさち紺染のいろわかあ吳ゆか紺屋のあると

田舎人

おこち吳てかほし與所しらち吳あみるひこやたんしよ一人たいもの

● 仲風

北谷 王子

なにの因果にうまれたかなまの十七八ものこたもて

平敷屋 朝敏

ままはひかあるかたき乃すへかたもひわすれゆるひまもあひらぬ  
與所目志のふあたまこもねうきなたつ二人ま、こやゆる  
あたてくひれこひわたらうき世鳥あかぬしまのあらは  
えあの木蔭にすみあれていきやあつかえやのわかていきゆか  
まくら二つに身は一人たてこひしきやはま乃真砂  
東風 平親 方  
えあの木蔭やかまのやとあらしまと間の浮世たひもの  
こころなからもはつかしやそてしかほかくちしのふ夜や  
あはらやにつきやもるあめやふらねとも我てぬらち  
高宮城里親雲上  
人の心のちはあきもを乃日影まご間のゆめのうきと  
大村

上句ハシバ  
アンマ詠歌

宜野灣王子朝祥

行かもころかしあんはしうちもころこしこも、らめまや  
みやまかくれのうめ乃はなたかしのまきちやかにひもらち  
石の火も我もむねやうちたさぬ間乃もゆるたもむ

喜屋武按司朝教

こひのやまちははて知やいやすくこもころ人やをらぬ  
うらめしやひごころあた、ひろかわて黄葉よなため  
兎にも角にもまごもれ一期をらね世界よやれは  
ゆめか現か幻かしゆらご手まくらのかたらひしちやす  
かごひこのふのみちしはにさえる夜あらしやふるぬあらな

宮平親方良綱

人のむくひ乃あるやらは生ちをるうちにみせてたはうれ  
なさけの心ごにつあかれて切もきれら、ぬ金の小繩  
磯のごまやのあきのつきつれなきや一人あかめあかち

江田親雲上盛常

(龜川親方祖)

うきなたつこもよしのやまをあごもろこもにちりる我身の

濱元良典

かね乃浮世かこの世界やあたら眞實もあたまなたさ

仲程良恩

よひごたもへは鳥やあくかたる間やないらぬあつのよるや

濱川親雲上

あはれ浮身のごもごあるつゆたきゆるそてにやころたつき  
くさのうら葉か我がそてやごひもあかつきもつゆのやころ

西平子

にしにかたふくつきみれえもばやまごわかれ近くあたき

嘉陽親雲上

あたら添ねのゆめさめてつれあまや鳥ご、もにあきゆさ

池城里親雲上

たもひあかはにひきかへせこひや武藏野のはてもあいらぬ

讀人しらす

ねてもさめてもきも乃くはんひきあわちたはうれ旅乃そらや  
みなご出まはかせたのむはしてあをまもるたもはみあご  
かれとしきく旅のゆきもこりいごのうへから  
嘉例吉たうくいごはる大和行いつきやい  
さてもうきその丸木はしわたてあやしさや、みちこ、ろ

よるここのもさきれめさきにゐるものかふたるむかし  
一期榮花ごたもふあやうわかさひごさきの浮世たいもの  
わたて悔むあえあんはしなつけたるむご乃ごろしらえ  
はあのいろ香をしほんはえわたてあかめてもごろわたくあ  
船ご橋ごもあるうきよわたらぬてやり朝夕あくあ  
こひのかきりのゐるものい浮世ふりすてしあぬかきり  
あつさ弓つるはけえ矢はつかけひきの自由もならぬ  
みやまろくれ乃岩つさきひえてくちるごも與所や知らぬ  
ひろに出すあかきつはたたもてたまぬふりしちゆて互に  
與所まえらすなたみわらへはあに夜ゐらしのふらんしゆもの  
たのてわくものわかまくらはあの匂あらはたこちたはうれ  
たのてわくものいろふかくそめてあご名くたぬごごに  
ゆきくれてみやまらごごろあてごひゆるやみのほたる  
ひごり丸寝のたごやごにたもひつくきらぬあるしかねえ  
いのちこそたのもしやまたもたのころのつきにむゑて  
つきはさやかに身は一人たしごもてをるむあきの十五夜  
つきのかわごめ身が肝をむるしななめたるつきやゐらぬ  
つきやむかしのつきやすか替ていくものやごごのこごろ

與那原殿内ノ下代

無常乃浮世ごたもへごもつらさ身にあれはくらしかねて  
あさけのつゆのふる間ごはなも匂まえゆるうきよたひもの  
しあけのわすられぬ浮世いごごはのこたぬ間や  
まごごひごごのうきよさめよてごごは乃ゐわぬたきゆか  
ごごしかやらあえかやらひろわかちたはうれ我肝やま  
ごごにたもむのみたれ髪さはきくいてたはうれ我きもやま  
加籠のこりるやまならぬちかくみゆれごも自由もあらぬ  
あらぬかやごごにもにあからへてをりやしやかあ  
むえはらぬかたいごのあわぬうらみごてつごもる月日  
たのみあき身はやごて誰ごまつむしの夜々になきゆる  
まあらぬのかごにある浮世ごさの葉のつゆごやすか  
浮世ごさ葉乃つゆごごろし乃ふかたごさやゆるちたはうれ  
落ごなかるご身かあみたごめるしからみのあらなやあか  
今はたもひの身にあまてつごめごもあみた與所にしれて  
たもひ深海にかせあれて目乃緒たつあみにまくらあかち  
こひのわたりやあみあれていつも我かそてやぬらちもごる  
このふ夜やなみあれてこひのかけ橋やわたごくりしや  
この小舟に二人のてきやならはもかせのまごごやゆる

與所の耻目もいらさらぬこきわたてみほしや戀のみさき  
鬼も角にもあらはあれしゆらふたまの緒のあるよかきり  
かつならぬ身をやたかあまけあて無蔵にやわうつち  
行かもごるかみちあまのまごてさくらぬ無蔵か行衛  
まてしはたかたらはにあたらずきるけものこちいきゆめ  
鳥聲をへうらみまにまたも開鐘かねのあるる心氣  
かねのうきよがあまけなぬこきなたんごもて急きひまひす  
かたらひこ乃夜つくらぬ義理に科がけてわかてひきゆす  
あかぬわかれのつれあさや朝夕たもかけのいきものかぬ  
ねてもさめてもわすらぬなれしたもかけの目の緒さかて  
た、な、か、し、く、あれもたもかけの朝も夕さも  
たもかけのくた、あましわするひまもあゆら  
つれなきや、く、ゆめにすかさされてあましかねて  
わすらんでまごろめはつれあさやあれかゆめにみゆき  
たもひねさめのあかつきや鳥もえらくご我身もごもに  
一人ねる夜のつれあさやごもろごもに鳴とあかち  
ゆきかあられか夜半にふるさむきつれあさやひちゆいさらめ  
あられうつはまにあく千こり身かごごにあまごなきゆら

ごまごあかしのうら千こりあままくらしゆて鳥聲き、ゆさ  
あはぬあらしのうらちごごつれなきやごもにあみちまくら  
あそぬあかしのうらあみにぬれてあくくも鳥聲き、ゆさ  
そなたたもひに身はやせて二卷あるたご乃三卷まきゆさ  
志をやのけもりか身かこ、ろあさよこかれこて浮世わたる  
武藏野かわかこひやたみつくすごこのはてもあひらぬ  
あへやんからま、ならぬのそてこの世界に義理のあたか  
ふらはふれひるほごも我身やはあそめのそてやあらぬ  
たもひ乃こすなこの世界に死出かやま路やはあやまかぬ  
さまをしのふの摺衣みたれそめあちやるるんのつらさ  
あたら白地にひろつけてみたれそめあちやる縁乃つらさ  
御船の小繩か身かゑんやきれてきれら、ぬ無蔵ご我身や  
あまにたちこまにたち物思ふれくごなるる心氣  
さらはさらむごたもへごも引されていきゆきわ身乃きもや  
かくれしのひの與所しれてたもひいたつらになるる心氣  
あわぬむる志のなまやれは乃よてこれほごも、のよたもる  
何につけても氣のこくやあまにあまやしやあわぬむる志  
たもひあたすなはあの身にか、て思たすかごるあやたら

いそのあをひのふたたもひこかれあく罪やたるにひきゆか  
 くらぎらぬのかゝにある捨ていくむごも、らめ志やる  
 形見こそ伽あらぬみれは氣のこくよあるも心氣  
 なかきいのちのうらめしや死出かやま路まぢゆるやすか  
 待をまで死出かやま我身もなま越てうきとかたら  
 首里んかひいまひらはいやりすら木棉ひきゆたんてたはうれ  
 美衣のそてこゝとせしめこもきやあれてやまこもてすて、ひまひめ  
 存命てまたをるむごかくうきよはいのちやたら  
 かたむたや、つきのやまの端にかゝるまでも  
 義理のせめあはもくちはて、二人ま、あゆる浮世やらな  
 淀のふは瀬のみつくるま御ゑんあてさらめ、くり逢たを  
 まつの葉に二人ねて今やはせをの葉も獨りせえさ  
 渡久山政規  
 あかぬわのれのつゆのたまはらへこもそてよかゝるしけしや  
 座間味盛令  
 つきやほさつの上にてれ乃よてわひ住のにはに、ゆか  
 新城安規  
 くらさらぬく、夕間暮にあれはまんくひ打を

義理やうきとのまのきめかこまれて我身の自由もあらぬ  
 こひのあさちのあき衣そめあさぬうちやつらさはかり  
 伊順  
 のかやうかたみのはあ衣そてにたもかけ乃朝夕すかゝ  
 城間恒久  
 まちかねて啼らきめやくそく乃今宵關やつまで  
 仲尾次政雅  
 てかやういかたまこかね浮世しらかはの關のあゑた  
 護得久朝良  
 關の戸はこきすこもし乃ていくこゝろ禁止のなゆめ  
 雜  
 よかてさめ兄弟や親かなしたそは我身や與所島のあらの一  
 粒  
 尙寧王御母  
 尙寧王妃  
 尙寧王妃

北かせの眞北ふきつめてをれば按司添前てたの御船ごまぢゆる

尙 質 王

十尋屋にをても八尋屋にをてもきもさきもさらめ按司も下司も

尙 瀬 王

こむしあかつらのあみにすそぬらち通たるむかしわされくりしや  
世界やくらやみかたをむ人もをらぬやめて開鐘かねもあゆらやまか  
上下やつめてあかに蔵たてうはひさる浮世たさめくりしや  
ひきたらぬこごや一人身まみしやうちも草のあはれ救てたえうれ  
いつみくちあけて渴きごめみえやうれふたつあひぬ人の命やれば

尙 敬 王

我が身つて見ちご與所の上や知ゆる無理するあうきごあまけはより

尙 育 王

青柳のいごにかれそしよむすうれしごさくの月ごまぢゆる  
あつき御恵や報るかたないらぬあさゆきも千代の御願しやへら  
青柳にたもごご乃縁むすて虎のかけはしにむしやひさちやひ  
虎に羽つてごふよりもはやく雲よ走いゆる按司の御ふね  
あらたまの朝に四方の民そろて唐土天きやなし千代のたねかひ  
慎のたねはものごごによたしや朝夕たみつめれひごのこゝろ

かきやて風

かきやて風

つゝしみの一字ごりまもてをればのとてそこあゆる上も下も

尙 泰 侯

さかていくあかにつゝまなよめとあるかご稻やあふしまくら

久米具志川王子朝盈

かきやて風

石名子の石の大瀬あるまてもたかけほさへみしやうれ我御主加那志  
この世人間やみあ弟きやごもれ沖繩御間切や一家内たひも乃  
あたま垣たいんす御衣あけて引いたいんもごひらひや手ごて引さ

大 新 城

らくふつの御帯よわらたし廻ち首里きやあし美公事てわなひきたら

與那原親方良矩

かきやて風

親子たしつれて出たらゆる今日や首里加那志天の御祝やごご  
ふゆるあめつゆの時よたかはねは民もたのしみゆる御代のうれしや  
なみかせ乃音もしつかあるあまの御代にうまれたる民乃うれえや  
御祝ごごつゝく御代のうれしきやよゝるごしまてもわかかあゆさ  
首里加那志天のもごしの御祝いくくりもごすあつやしらぬ  
いちもつくされめ朝夕御万人のかみねかひよえちやるけふの御祝  
たごもも乃ごごにすくれやいをても人乃みごころやまごごひごつ  
深山そこもれる月のかけしらぬ與所目あいぬごもてしちやらやまか

全 全 全

恩納節

かきやて風

全

仲村柄節

人にあることのかくきらぬものや、みの夜のうめの匂さらめ  
 敬の一字身まもてをれはうきよものことに怪我やないをめ  
 いきたらぬことや一人たらむく互に補てごしやとる  
 人のとまあしやあらはしつれてたへらすにうつるはあのにほひ  
 互にあさきや一人たのみくいつもかわるなやうごしやとても  
 かにもつれあさめ旅の上のそらやあかめゆるつきも伽やならぬ  
 馬とひさかへせしはまむきみほしやたごにさく名護の許田の手みつ  
 こころ何のめは世話ごもわすて酒やのちのひゆる薬やすか  
 六七十なても歳よごしゆるひきやしかあきもやいつもわらへ  
 御祝日になれは押せもまごもたんちゆかれよしのしるしをらめ  
 心つかたらごもて御待しゆるうちに御船やひごはしら那覇乃みなご  
 ねのはへやいはほみはたつのごにこごはきや千年子孫そろて  
 喜安親方  
 浮繩秋山をくれあゐにそめてやまご吉村の御茶のあそひ  
 名護親方 籠文  
 親になてたや乃恩知ゆんでやまのむかしよせごやなまごしゆる  
 やまぢふみわけて道しらえ我身のたごひあまごものうらみゆか  
 ほめられもすかぬそしられもすかぬ浮世あたやすくわたりほしやの

仲村柄節

かくさてやりすれは天ご地やか、みはつかちやゆけのうつるごめは  
 鳥たいんす深山しける谷ゑらて我が身かごをめるごごのしやらしや

具志頭親方 文若

ほまごそしられや世の中のならひ沙汰もなぬもの、のやく立ゆか  
 たひきも志やへらぬすみもしやへらぬつほて石あやひすくてをらあ  
 平敷屋朝敏

散山節

雲岸和尙

石嶺親雲上

恩納節

あからへてをれはまた御行逢もすらゑもしごさきた、は花のうてな  
 とたまたまちらち呑む間乃うきよさめて慾悪乃つかはきやしゆか  
 酒も何かよらはこの世をてあかれ祭りした、れ乃あの世いきゆめ  
 わほらさのわてや山島しゆんであつふらは粟穂もららみやうれ  
 伊野波親方  
 惣慶親雲上 忠義



仲村柄節

仲島乃小堀あみうちよいかはものよたみつめれうその住家  
國頭親方

かきやて風

瓦屋節

栢堂和尚

遊女よ志や

よたるなる御代乃るるしあらはれてあめつゆのめくみごきもたかぬ  
唐土天加那志浮繩たるあ志や、かたらても與所のたにやしらぬ  
豊む中城よしのらのたつきみかけてり渡てさひやあいさめ  
そてや紺染にちめあさぬあてもこ、ろさためたる人ご佛  
うれえさや里か座羽箒たはうちむねに塵つかは、らてすてら  
こはもそよく、こ島もこなく、こつあきある牛のなきゆらごめは  
あゆるもの聞ぬあらぬもの聞すこの世あらあのみちかくあた  
生居たる間や我身廉相にみしやうち死はらんしやう門に通のしゆか  
あんま主やよもてうまれ島ひまひい我身や仲島のゐらの一粒  
一のかいさ二いさよて遊ひゆたる、つの間里やたごあ、たか  
恨む比嘉橋やなまけあいぬ人のこの身わたきてやりかけてたさやら  
ひこやあきこ、ろあたらませ我身乃、てて羽衣やかかせのやゆる  
二十一日の夢やいあむかえあるひさめて極樂の木戸にいゆさ  
銘 莉子

邊野喜節

恩納節

恩納なへ

中城ハンタ前節

神村親方

仲村柄節  
恩納節

一本ニ東風平親方

逆倭

一本ニ惣慶親雲上

あみの聲もごまれかせの聲もごまれ首里天加那志美御機をかま  
明日からのあきてさこ番のは、瀧あらそあめのふらなやすか  
こ、ろうさやゆる春の野に出てかせにそ、こはちあそふうれしや  
きやかてるつきまさそはれて我身のおかめらんこもて出ていきゆん  
仲島のうらのふゆのさひこ志や千鳥なくこ系にまつ乃あらそ  
さきここにははて恩納村はつれ路はさてまつ乃なたるさきとらき  
北谷王子朝騎  
九重のうちにつやてつゆまちゆすうれしこ菊のはあこやゆる  
湛水親方  
露の身はもちやい遊ひゆをや笑てこの世ふりすて、いきやしやかあ  
津嘉山親方朝徳  
世界やものたこもあくるりの聲も清てありあけのつきのさよらさ  
高嶺親方朝行  
我ら身さめこもて與所ためたのてそしりあまむきゆか人のきもの  
東風平親方

かきやて風

上下乃綾門關の戸もき、ぬ治とる御代乃しるしさらめ

田島親方

御主加那志御願ふ、のこふそろて出たらゆるきもにさむのある

天久親雲上

かきやて風

首里天加那志も、こわれてふわれ御万人のまきりをかて

仲吉親方

干瀬節

はなにやまあらしつきの夜、かきみか、るつれあさと浮世さらめ

全

か、る夜やむるし一人ごまい、あれか門も我門もつきまた、き

玉城親方

仲村柄節

世界や、まかはの丸木橋こ、ろかにもあやしきめわたて見ては

綾蝶節

かにやる御座敷に御側をてをかて我扇やれはわさへつてごみやへる

思納節

たもかけよのこす許田のたま川にあまけてにくたるみつのか、み

かきやて風

そてに匂うつち朝夕あめたるはあのためかけのはすれくりしや

全

美公事ここまうちうれまこ菊乃あ乃さくころにはこていまいれ

義村王子

仲村柄節

こ、ろあてみあけむねうちのか、みもの、かけうつを賣たいもの

全

きものもてなしや竹乃ここすく、義理のふし、やなかにこめて

あたにあむあやう野邊のはなす、き一期たのまらぬせにむめて

かきやて風

いつれかれそこの木ねかむ叶はこてかれよしの美風まごもたしゆき

仲村柄節

きもの梶しちゆてわたる身か舟やあさけふくかせこ一期たのむ

宜野灣王子朝祥

仲間節

うちかさね、かさなゆる御祝御代乃たさかりのしるしさらめ

仲村柄節

たもここのあても與所にもたられめてかやうたつれて遊てわら

全

ひにやさはしきやさや生付たいものた、まここ守て浮世わたれ

全

與所へらひもすればきもこかあしものた、まここつち浮世わたれ

たごひ仲島や音たえをてもいづし名のくちゆか戀乃小江

袖ふたるむかえゆめやちやうも見えはしはし慰めになゆるや

かすかけてわたる深山くほこ、ろ一期身の世話のえてもあいらぬ

やみの山原や道しらぬあものつきてらちたはうれ仰きをま

なさけ身にそめてわかれよるきはやうしちかみ引きゆき島のおこり

美里王子

虎頭山出るあきの夜のたつきくもりあき御代のか、みさらめ

あまにあて肝しきもごうらめゆるよしまらぬ月日あそひすくち

豊見城王子朝祥

ごし明んですもよのあけるまでよ今日ご御万人のむねやあきゆる

豊見城王子朝尊

押風もすたしやてかやうたえつれてさやかてるつきのかけよあそは  
若菜つて人やあくさみもしゆをかたもむつて我身やくりしやはかり  
ひかあ聲立てなきやんてやりあまや與所にためあちと聞ゆらごめは  
三味線の音聲き、ほしやごしちやる我か心までものよてむきゆか

小祿按司 朝恒

治まごる御代のえる志あらわれてみやますむ鳥も人におれて  
てかやうたしつれてはな見しち遊てくれいくごしのなこりわすら  
たるやても人のきもやしら糸のそめあせはいろのかわる浮世  
浮世ものここにあさけあるならむ人よなまむご乃あはれしらね  
肝まよてさらめたのまらぬ花に與所のあかめゆす朝夕き、て  
いつしわすれよか朝夕我が親のこ、ろなくさめる人乃なさけ  
命存てをれはむかしくりもごちあはれかたらゆるせつもあるい  
たちわかるそてに露の玉ちらちとむむご葉やわをれくごしや  
嘉例吉の御旅ひそき行きいまうれきもの願しちゆて御待しやへら  
名に立る大和御登りや下すたかれごしみやいるたねるひ志やへら  
親かなしめ我々のねかひも御登りや下りいごの上から  
たみつくす月日はやく押過て寅の宿きはまりたまちしやへら  
たより押風乃ものゆものやれは日々たごつれも聞らやをか

かきやて風

干瀬節

かにくりしやあるいま、あらぬ我身の別らてやりすれはそてや引い  
ゆろにあらはれて移てゆくものやうきよ人々のはなのこ、ろ  
た、ひちゆ心をても與所の前よごもて朝夕慎まかなめさらめ  
はしめあることに終まつ、ごみや人のたごあひ乃かあめをらめ

浦添王子 朝熹

仲村柄節

全

全

稻まつん節

仲村柄節

全

かきやて風

祝 嶺 親 方

身持かあまよくやさなたきゆめやすあいちもまたいふもの旅のそらや  
いつれ嘉例吉に浮繩ささいまうち嬉しや我のやごにたてたはうれ  
しつゝあれそめれつねに身かこ、ろ波た、ぬ水ごかけやうつる

仲村柄節

かきやて風

小 祿 親 方

兼 本

義理せめふごかえまたも袖合め我かまゝ、よならぬ浮世やまか  
はあ乃よしあしや咲まゝのすかたまごたのもしやにほひきらめ  
あしやあし出ちあはれ母親やたごな我かすゝた見たなひまうち

喜舍場親雲上朝張  
(大山親雲上祖)

仲村柄節

いつし名のくちゆか戀路しやるひごのとしや仲島のうらにのこて

瑞 慶 覽 昌 綱

仲間納

梅たいんすゆきにつめられてあごゝ花も匂まじゆる浮世たひも乃  
あたら身は持むつらむみあすな苦みや樂のもごひたいもの

關 勇 助

今歸仁居や肌さむきあたすうらそへてたはうちぬくゝあたさ  
木綿はたふかへしら纏うちをけて無藏につむかさあもめんこはな

小橋川 筑登之

月日ある間やひかりあいなむたきゆめたごひあればて、野山あても  
をかて覺出しゆさむるし唐土のたみごたのしたるたまのうてな  
心つもくらやみの道にをめやすか月ごとむ間のまちのくりしや  
聞はふつかしやいつまでもごもて樂もくるしみもしちやらやすか

散山節

あにあるあちやあにものあけて吳なあかつき乃別れしらまごかに  
上ん殿内たん前えんし前ごいちゆて遊ひゆたる顔乃わすれくごしや  
あままたや浮世たるご語らゆかたのむ人やむるしゆめにしちゆて

喜 屋 武 親 方

玉 城 按 司

一本ニ高宮城親雲上全

さす花に向てたるゆへにあきゆか生けてこの世界にみほしやあてご  
草葉あめわち世界のためしちやる神の世のむるしまあてひもうれ  
外や破れてもよたしやさめ我身のひかりある間のゝはつかしやか  
竹馬乃むかしくりもごしゝ若狹大道にのやひあそは

安 慶 田

早作田節

のかやう山あらし咲き出ゆる花はむごさありまたぬふきよちらす

田 里 親 雲 上

散山節

花やせつくれはうちわらて咲ひなかめらぬ往きやる人ごあはれ  
忍ひごさやれはのこあいご葉もあらしゆてあれか行やらごめえ

仲 程 良 恩

兼 城 親 方 朝 義

鼓責時あらし開鐘あねやうご無藏かたきあていきゆらたいものはあとかめても紅葉あかめても詠ゆる人のこゝろをらめ

豊里

住人やをらぬあねはるやごにたかためにさきやもには乃うめや玉の緒のいのちかきりあてさらめ貫もごめらぬ我はあちらち

伊計親方 良徳

東風 平親方

後生の長旅のもごられんごもてあてなしのわらへ行きやらやする我身童へごもてくおしゆらはくおせくお志田の稻やあふしまくら

久手堅 筑親雲上

御慈悲あるゆへご御万人のまきと上下もそろてあやきをかむくれる日もわきて明る夜もしらぬ浮世與所なしゆるはあの木蔭たごひむらつきもあわてさまむくおせめつゆるめつの手繩あて、樂なしまごもてこきわたてみればこひやくるしみ乃潮ごのにゆる明てまたあけるあきのくれあゐの錦さあいまいる御願しやへらあさましや夢の浮世わたゆんで朝夕きもの門や世話のたき

諏訪木工右衛門

勝連節

和仁屋間門のたしをやけやひあくまはも勝連の島やかよひほしやの

七尺節

しら繩いご縁はたご乃かれらぬつめて寄まさる無藏らたそは

翁 長親方

仲村柄節

よるごしやつめて幾度あめゆかあごりたちまきるあきの今宵

我如古里親雲上

我が自由のあゆて引よごめたかあたちわゐる里か美衣の御袖

大工廻親雲上 安祥

散山節

無常の世の中やあごさきごあゆるまでやうはあすはのなかはのこち

我謝親雲上

述懐

よしまれんごもて袖ごやい泣もきやあゆかまゝあらぬ浮世たいもの

仲田親方

あたら瑠璃乃玉よこり川よたごちすまらすぐる世もあいかしゆゆらかへし

上間 筑親雲上

潮時見ちわたれ浮世こく小舟たごひあみかせやたぬあても

島袋 筑親雲上

仲村柄節

浮世あたやすくわたりやしやあらはまごご外のみちやふむあ

安仁屋 政章

蜘蛛の糸かせにかゝるなやうはへるしのふまじうちのはあにまどて

徳元里之子

まごある人の跡やいつまでもきかえゆくためえかつやしらぬ  
志はし鳴鳥もこゝろあてくいらな三年わかれちのこよいやれば

幸地里之子

首里節

たまの美簾やしらくもよみなちうちよまひる無蔵や御月みなす

奥武喜教母

名を殘すここのしゆくしてしちふゆめせめて親のこしひかぬここに

野里安重

たきやあもる御代にかりなをささらめ二月舟浮て行きやい來ちやい

安次富親方

東江節

涙とりほがよいこ葉やなひらぬつみてわかれちの近くなれば

保榮茂朝規

このころにあれか沙汰かこちくいゆらいらぬ年寄のゆめにみゆす

大宜味親方

袖合遊ゆたるこしひきやてけふやむかしたのころのにやだもわれて

互にたみわきて夢になるむかしたひ出ちやさ今宵つきにむかて

高嶺按司

かさやて風

いちの帆のほなかふいつ、む美風聞得大君のたすし美風

美里王子

冠首

松下乃くき葉ふゆかれにあてこ牛や玉元につなきたきやる

讀谷山王子

袖よ引こめてしえしてやりあれかいちやるはこは乃忘れくりしや

聞はきくこことまたる宿もかろくまこと清ら瘡や今こしさらめ

こ乃殿内うちにくのはあ活てるたみればあんちや心やこかね

江洲親雲上

はるくこをかてあつかしやえてに秋の夜のつゆのふゆるしけしや

西堂

天と地乃あかにまてこ字のあすやかしらこりあつけまわす手先

福地親方

早作田節

ひら松のかけにしのふあこくち居きゆれとも與所のしゆらこめは

糸満親方

無情にわたられめ人乃ならはし乃たこひ義理乃上の浮世やても

翁長良眞

なご乃屋乃ならむこ外むきならひものいさまさまうかこするあ

栗國親雲上

金武節

見る人やつめていきさめたり〜つともあかれゆる許田の手みつ

盛島親雲上

我がこゝろつくち朝夕そめあちやるこんとめの糸もさめていきゆさ

鉢嶺筑親雲上

思きやけもすらぬはる〜こゝろまうち語るうれしきに百氣のたま

知念筑親雲上

たごひ身かゝはねさらすこものよて胸うちのも〜みくらくあしゆる

崎山筑親雲上

あの世導ゆるかねのこゑきけは出立る我身やとくのくりしや

高宮城里親雲上

歩むこゝ深くためつめをれば手放さぬたまのきつのつきゆめ

護得久按司

(久志按司先)

中城はんだ前節

こひたちゆるはへるまつよまてつれら我身や花のもこしらぬあもの

泉川親雲上

慶良間からたをこすくに乘みえやうち嬉し顔里とをかむこごうさ

糸數里之子

那覇の親泊たまたるはしらかたむら乃城ひちゆよはえら

神谷厚詮

汀間と安部さるひのかのたの濱に無藏こふやかれ乃百のくりしや  
七八十までやあみ〜のよわひよねのよわひこへても〜の御祝

幸地里之子室

時あらぬあらし吹ゆんでためはましたてるをまもたたらやあか

尙貞王

あんちや春あふへこかねちくた〜ためえすりあまるゆきの眞米

義村王子

さかていく宿のにはの吳竹やふしここに千代の祝をこめて

まつ葉のここに二葉から出てゆくちせさかるやこのうれえや

與那原親方良矩

鶴龜やまつこ竹の葉こゝもにも〜こゝつまでも、たへさかへ

大工廻親雲上安祥

こゑのわかみつよ手にくみやいみれは君が万代のかけのうつて

あやかやいみほしやこふきや八十八にあられてもあまの左嘉舞

鶴龜こまつよよはむくあへこて千年んたれれやう果報な御主前

宜野灣王子朝祥

幾年よへても〜ろとまさこてにえの松竹のもたへ美さ

朝夕もてあそふ三味線のたこ聲きけは思こともわすていきゆさ

本部按司朝教

小祿按司朝恒

二葉から出ていくこゑかへたら岩ほたきまつ乃もたへまかへ  
こふきどのへる菊乃さもつきや波かわしくも、こまても  
嬉れしきや母の十百歳よねもてまつはる乃子の日祝ひあそふ

東風平親方

かきやて風

うれしさや庭の竹のふしくに君かよろつ代の祝ひこめて

伊舎堂親方

はなもそろこひの眉開きをればやかてうれしこゝ菊のあるし

讀人志ら

ちるれん節

みらく言の葉乃玉やいつまでもおかまか、やもち沙汰このこる  
ゆかれくわらへた、いかれけふやたやぬしの御祝おきやれば  
拜みほしやちちゆてをたこさならめをかみつめあけあ夢よこもて  
庭にうめさるち床に伽羅をきて福祿はるけても、こてふまて  
うれしさやめくる年のあらたま貫きかさねくも、こまても  
あら玉のこしに炭と昆布かさてこ、ろからすかた若くあゆさ  
翠りある竹のよ、のふえくにもるよろつ代や君こしゆら  
まつの上の鶴やまかたふりすれば龜やうちわらて潮はあふきゆさ

かきやて風

全

かきやて風

全

伊江節

本散山節

沖泊節

この秋や君かうれしこきくのいつよもまさてさきやるさよらま  
うれしこゝ菊のはなのさかつきや持ちあけあ千代の祝ひこめて  
稲やありひろてかまもちちゆてとかる日と選てまきゆて遊は  
命かほ願は石の身のこゝに首里かたるかひ願はけらひを座敷  
けふのはこらしや、あをにきやあたてる蕾てをる花の露きやたこ  
ほめそしりなかいかわるあうきよひこやた、まここむこつさらめ  
與所しらぬこもてこ、ろあさむくな天と地のおかやか、みたいもの  
與所の上やたるもあき乃夜のさやか我身のよしあしや闇路こ、ろ  
らんの匂こ、ろあさ夕ためこまれいつまでもひこ乃あかぬここま  
きものもてあしや蓮葉のこゝにもこのあてかこのあいらぬここに  
はり川の水やはりやとこむこも首里加那志美公事よこのあよめ  
ちあさたるかけて油断こもするあうめの葉やはなの匂やあらぬ  
あれやうあれ茄子すこのやのあすひあらなしゆてあすひとめあ立め  
世界やふりものいあかひ屏風たて、花やたしるくち匂やきやしゆか  
のかす思里前ふきまはすかせにはあのおうつり香の匂むたちゆす  
せつかわる浮世しらなくひすのこきの間のはなに一期こもて  
ふかきあるゆへこあみかせもたちゆる浅海こきわたれ戀乃小ふね  
たまこかね親やあしこあしみしやるいちきかしきゆきやなこの勝れ



ちやんな節

關こはてさ節

仲村柄節

大兼久節

瓦屋節

首里節

全

大田名節

長伊平屋節

ちやんな節

きのふけふごめはいな昔なる心覺らすによたるごしの恨しや一期たのまらぬはなごてやりいゆたる人のいごはやあまごしゆるあらす四ツ竹のたごにまきりてごたやくめさあても御側をたる戀の志からみかあかしまの小江なみのよるひるもわたるかねてたんちよ豊まれる名護のはんごころ松と槐のもたへまかへ瓦屋つちのほて那覇みなごみれをこひしつり舟乃あたるきとらさ西乃まのほて眞南むかてみればましらごにみゆる里かご乃ち眞物さあのはて圓覺寺みればかくれすみばまか手巾ちやけさ伊舎堂森のやて手巾持上ればはわるふたる手巾さごかふゆさ逢ぬいたつらにもごるあかつらのよすかまなみの我そてぬらちあわぬつれあさや薬師堂乃うらに鳥ごもろごもになきよあかち田名の浮島やかせまになひく里まにあおく田名のみやらへ伊平屋渡たつ波やあみやれはあみゆきしかくまもこの大波小あみ眞謝ご眞仲地やかごひほしやあすかしらせふり松のした乃志けえや眞謝乃うらなみのけごりても乃馬にくらたえてわ無藏つれら走川乃ごごしあみやたちゆいくりもごち見ほしや花乃むるごむかしくりもごちなまにあちみればなつかしやよらて語ひほまのわあれても無藏かあさけ有明のつきにたもかけやよりよまさて

干瀬節

仲間節

全

かきやて風

花風節

稻まつん節

花風節

つきやしりみしやいら有明のむるごもにあかめたるごの行衛たるつれてごよひつきやあかめゆかたもあけやたて一人さらめ覺出ゆきむかしわられちのつらさあまにあかつきの鳥聲きけはえたる夜やいつかたまこかね御側きのふけふごめえ昔なるいゆきやしわかれゆる人のしなさけ乃たごひ音信やたへてをても幾世なるやごかすみなれし人のたごつれもあいらぬ荒よはていごやなきいけてわか會釋志ゆもの旅のゆきもごいごの上ら美懐あけてわみかくちたはうれ御船のほてさごか住居所をかま朝たほん夜たかん我たしやけあらて如何すんちよ御旅御待しやへか我やうまゆあてあし情掛みしやうち如何す思里や御旅みえや心か思かごごなゆる浮世やたらし旅のいくさきもつれてゆきゆいとちよしまらぬ旅のそらやれはかあしふやかれもすらあゆめ繩ごゆる御船のよしちよしまれめいもうちまうれ里前あさゆをかまゆまひつかは里前御状もたはうれ心やそごたまちしやへら里や明日ちふね乃みやけしやへか嘉例吉の歌ごみやけしやへる三重城よのほて手巾もちあければやふねのあらひや一目ごみゆる三重城にのやうちまねくあふきまたもめくり來てむあふ御縁里前御船送てもごる路すからふらぬあつくれ乃わそてぬらち

干瀬節 全

里ごふやかかれてもごる路すゝらたもことやゑたる濱の眞砂  
御側をてたいんす思やまさやへい別て我身一人あらはきやしゆか  
染あれし御縁いきやすわかれゆいまいみるかた我身も列てたはうれ  
何はれ里よまむこの葉もたへてかきくもて雨のふらあやま  
わかれゆる袖に匂うつちたはうれたもかけのたゝえごきにじやへら  
たもふけや朝夕わかそてにたがれまたをむむ間の伽にまゆもの  
むね中やあみたかをつきやわらゝあまた與所へらひもあらあゝよめ  
いのちさへ我身のおからへてをれはまたをかむごも何ゆらやすか  
百あぢのはんたたまねまぢみれは西の松もねかゝふりきとらさ  
天美子の御神なまくたまみしやうちつくる島國や世々にさかる  
二葉あるまつの老木なるまても御掛ほさへみしやうれをかてきてら  
六十かさへれは百二十の御歳も、ごいつまでもをかてすてら  
あそひほしやあてもまごにあえはれめ首里天加那志御祝やご  
たごあゝたんでやまあそひわすれよめあそむ庭の片手むまか片手  
なまん世のむかえくりもごちまらめ十日越の夜雨ごきもたるぬ  
十日越の夜雨艸葉うるはまゆす御かけやさへ御代のさるささらめ  
めくみある御代のはるるせになむく青柳の心ごやたみのすかた  
てる日のごごに仰く我かきみのさるりゆく御代やるきりないさめ

長伊平屋節

揚作田節

よしやひなふ節

全

こてい節

よしやひなふ節

全

作田節

浮島節

よしやひなふ節

浮島節

垣花節

躍こはてさ節

沖泊節

躍こはてさ節

すき節

港原節

すき節

垣花節

御万人乃まさりあふき拜みやへら世界にてまわたる美代乃るゝみ  
豊ある御代や三十六島まであそひたのしみゆるごごのうれしや  
みちくの巷うたうたて遊ぶ彌勒代の世果報ちかくあたさ  
彌勒代や目の前むきとせてをすゝふたかちやの布やたため童へ  
彌勒代のむろしくりもごち今に御万人のまさり遊ぶうれしや  
沓や伽羅ごやす御座敷に出てをさるわきそての匂乃まほらしや  
うちあらまゝ四ツ竹はならち今日や御座出てあそふうれしや  
うちはやま竹のふし／＼の中によろつ代ごひくたごのしほらしや  
打あらすたけのふし／＼もそろてはたち宮童乃遊びきよらさ  
はつはるにあれはこゝろたかされてはあの本し乃て出ていきゆん  
匂にひるされてはあ乃本し乃て春のうくひすのはつ聲聞きやさ  
たしつれて互まはあのもごま乃てそてに匂うつちあかめあそは  
今日や御行合をかていろ／＼のあそむ明日や面影のたつごごめは  
月もてりきよらさ花も匂まほらしや押風もすたしや出てあそえ  
照月もきよらさ押風もたしや押つれて互にあそひほしや乃  
あみの聲もないらぬかせの聲もあいらぬ心はれ／＼ご遊ぶうれしや  
はなの風廻やかせつれてめくる我身やごしつれてあそふうれしや  
経たらまゝ／＼緯たらす／＼たみさごゝ我身ご遊びたらす

伊集早作田節

全

全

百名節

全

さあく節

述懐

與那節

遊ひかこまふちやる躍かこまふちやる歌もうたはらて遊たはうれ  
 遊むにやの草葉たかさね粉あちやかわえた宮童のさねこあちやさ  
 あふしこへる水やたやけれはこまる我かはたちころのごめのなゆめ  
 桐衣あせしほてかゝんすそぬらちあそひゆたる我身もたごあゝたき  
 日もくれていきゆゆ急きたちもこて明日もたしつれて出てあそは  
 夜も更ていきゆいてかやう立もこら山の端にかゝる月こつれて  
 月もなかめたいてかやう立もこら里や我が宿にまちゆらたいも乃  
 くらされる間やまつくらちみやへらくららぬ時やこまひてをかま  
 別れかたあきや互にあらやすかつれあさのほまり一人ごもて  
 振棄ていかはくほかすの心にかゝるせみとりも鳴んしゆもの  
 このつらさみやかあ捨ていかれよめたごひ朝顔のはなごいちも  
 物思かをしめてすてゝいかれとめいるな義理の上の浮世やても  
 里をかむ夜やよひごめえ明る語らひつくさらぬゆめの浮世  
 夏の夜のあらひや語らむつくさらぬ思ひいこご葉ものころらめしや  
 よひごめえあける夏の夜乃あらひやたまこかね御側ゆめの心地  
 たもあけこつれていきやす別やへか語てもあかぬなれしたそは  
 我あよたつはんち里にうちはけてたもあけ乃た、は我胸ごもれ  
 棄ていかれらぬかあききやあれかたあわかるそてにすかてあけは

干瀬節

曉節

清屋節

仲間節

稻まつん節

こはしてまくらに鳥もあきすめてかあきさやあれにたもあごのこち  
 またいつか吸らしらぬてまくらようらめしやいろく鳥乃そつこる  
 かあノ、ご互にかたらゆるうちよあさけあいぬ鳥のわあれしらち  
 月の影たいんす袖宿かよごこはしまちみしやうれ語らひほしやの  
 たあむ夜や更て明雲やたちゆいにやまたいつをかても、きのひゆあ  
 にやまたいつをかてかたる夜やしらぬ別ていく路乃つゆのしけしや  
 あそひなれそめて立別るけふやうしろこてひきゆさ島のなごま  
 あうひそめなれていきやす別やへあはれこのやごにたもあごのこち  
 人の思きりやあつぎ弓こゝろさらはこれまてのわかれすらあ  
 ごひわたるかりに文やちやうも持ちふやあれのつらきややりすらあ  
 鳥やちやうも飛ぬ渡海やへそめて夢のふもものやたうはごもて  
 渡海やへさめてもてるつきやごつあれもななめゆらけふの空や  
 なれぬ與所島やあにもつれななめたのかたらゆる人もをらぬ  
 行衛あらしゆて待兼らごめはあえれよくまさる旅のつらさ  
 素立らぬ親の、よてわ身あちやはあにたあ出ち與所にもます  
 このあはれしちご渡ゆかや浮世またごくりもごち見たぬ世界に  
 我身やのあ、ねる與所やなたやすく渡てたのしみゆる浮世やすか  
 樂もくるしみも時んでごゆすか、にもつれあさめくらしかねて

風花節 全

あけやう我もむねや奥山の枯木くちはてるまでも與所や志らぬ  
何と志さまかえてもあの身よやれは餘多與所へらひも志らあよめ  
潮もみちやこてわたる自由ならぬ志はしまる千鳥のやりたのま  
頼むかたあいらぬはなの身よやれは夜々にたてかわるつゆこそゆる  
尾類くは身やあはれ心よやなき心風のたたまにふれてひきゆき  
見ちやる世や長さ見たぬ世やつまはるかあさやつゆのやこるこち  
紺染のそてのいふくちゆんごめは百八のたまやぬるぬたする  
廉相に思ふされ焦れはて死はかんしやう門の草葉あらすごめは  
ひきやすあからゆか火たきやにのこてあまく片さきもいきのふらぬ  
よりつめる歳に無蔵やききたてあさかをの命くらしかねて  
あつか志や人のこの世わかれた去去年の今月乃こよひごめは  
朝夕さもよらてあかぬ語たる人もいふくさのかけにわかつて  
志ぬる身よあはれのこる思里やなるめらあたきゆめつきもはあも  
素立たる里やこの世にやをらぬたるたのて咲きやか無情乃きくや  
あえれむねう、死出の暇乞と旅にこよせていぢやらやあ  
あみあれし母の懐え出てたるたのていきゆか死出かやまら  
あてなしのわらへ死出か旅しめて山路ふみまてあきゆらごめは  
死出のやまみち一人あきいらは手こてあきたはうれ阿彌陀佛

伊野波節

散山節 全

全

散山節

子持節

伊集早作田節

散山節

あてふしのわらへみちまよてあかは押戻ちたはうれ阿彌陀佛  
誰と暇乞やかたてまきあたるしはしまてつれら死出か山路  
朝夕血のふみたそめぬらさよりやしはしまつれら我身もごもに  
誰ごもてき、ゆか一言もあいらぬむかしかたらたる友ごやすか  
つかに手をあけて我が呼ひなきも後生にたてつきやめいれもすらぬ  
啼かあしなきもきく人やをらぬごもあくものや山のむき  
夢にたつねても音信もあいらぬあわれむたらたる人乃ゆくる  
あはれ磯はたやあまもさむさめ朝夕さなみのたご聲はかり  
深山さく蘭の匂ごよくまじゆるたごひみる人やをらぬあても  
大か、んひちや、よりもごり、我かよ、る年もあますあらな  
與所からご人の年やよらしゆ、るきもやあまはたち内ごやすか  
ごしや秋すれてふゆかれになてもきもや若松のはる乃みごり  
ひやく見たぬ世界にも乃思て乃しゆかけふ遊て明日やしらぬいのち  
つくくご一人こ、ろたつぬれは自由にわたられる世界やあらぬ  
むちやあわあわあち布にあははかり花もやすらみも織ご志やへる  
たるあさきならさたまらぬ世界や日々のかたらいご遺言さらめ  
いご葉の匂ごこの世界乃あたまちりてよしまらぬつゆのいのち  
聞は淋しさや夕間暮ごつれてた、く山寺のかね乃たごこる

首里節

全 全 全

物のよしあしや二色さくはあ乃ゆろのこごわかちみせてたはうれ  
 浮世をみかねてかくれさる宿にあまりてりきとらさ夜半の御月  
 あかひす羽美衣や濡らはもはかり里か片んちやうむぬらすきやこご  
 城からたりて申時のかきりたるにとこをれてあまてまうきやか  
 よこされもあらぬひかきれもあらぬ至極雨ふてこなまてきちやる  
 至極雨てすもごきの間ごふゆるきやはらふる雨の世界にゐるい  
 朝夕身に添てきちやるこの胴衣肌にうちかけてすくにいまうれ  
 形見なるごんしゆ肌にうちかけてこれご後生まての支度さらめ  
 大田名のよめやなほほ志や、あすかいしやらほき道のくみのあくて  
 石原あさみちやふみやあくまさん大田名のよめやましやあらね  
 やかて村くものかくす月やらえかけや身あそてにうつちたはうれ  
 たごひ村くものかくす月やてもはれる間のかけにしのでをま  
 ねもごにわたる風たそりあれは浮舟のこかれのよてしやへか  
 浮舟乃こかれごきの間ごやゆる吹あはすかせ乃あらんしゆもの  
 籬内のくごしや思ひしりみ志やうち風よたごつれやきかちたはうれ  
 忘るまやあいらぬ思やしゆ、れごもたごごゐるかせのたそくあれを  
 節よまぢみ志やうれ露やふるをらめ蓄てをるはあの咲あたまきゆめ  
 雪につめられてうめや句まじゆいつらさたみわきてせつとまたね

大田名節

全

干瀬節

仲順節

冠首

かきやて風 全

春やはあさかごあつかしやわらへあきはて、あらやふゆんさらめ  
 消果てあごにたつね来るさごや物思ふれくごあちゆらごめは  
 まごろまんすれはゆめにすかされてさめて終夜ものごたもて  
 四方の民まても今年きよら瘡やかろくやま、ご出るうれしや  
 蘭の匂たて、御座に伽羅たけはほこてきよらかさ乃神やいまひを  
 上や下までも今年きよらかまや願乃ごご三粒出るうれしや  
 里々にはやる歌までもあまやかろくきとらかさの御願ごごは  
 乃ごもある御代にはやるきとらかさや上下もあろく出るうれしや  
 歌や三味線に躍羽志ちゆてきよらかさの御伽遊ふうれしや  
 た、三粒たはうちごご志清らかまや上下もあをく神のめくみ  
 伊渡の山寺やごきかうしあたらやくとくの兼次あてもあいらぬ  
 辻やはなさかり渡地やわたてこひや仲島のうらのごまり  
 道くらすつきや雲にかくれたひ、きやすわき出ゆか雪乃やまぢ  
 よろつ松山の院にかけうつち法のみぢてらす雪の叟  
 寅のはのかせ、寅の日に立ち虎のはごしめて虎乃門口  
 こんあかい乃御待月てのたまあまからの御まぢ日よてたまぢ  
 たんちよるれよしや撰てささみしやいる御船の繩ごれは風やまごも  
 嘉例吉やいつも嘉例吉ごみしやいる只糸の上から行きやい來ぢやい

全

全

かきやて風

嘉例吉の御船よかれよしはのせて旅の行もごりいこの上から  
 あかご渡海あかへいこのかけられめ眞鱸押かせごよいごさらめ  
 去年よても今年旅乃みちひろて船をらちみれえあみもしつか  
 たもてはあさかちごもよすちひかちあれよ志の御船のはるる清さ  
 沖の側までや思弟きや部つれ渡中たし出れはかせごたのむ  
 渡中たし出れは船頭まつても眞鱸乃りみしやうれ御船の船頭  
 船はらちたひんすかにうれ志やあもの島拜てあらやよくのうれしや  
 さきみはれ唐土あごみれは浮繩これほごの美風今度はしめ  
 たとそあらみれはあひあ渡海やあか御船はらちみれは近地たひもの  
 本帆や帆もたち祝のさかつきのめくる間につきやま山川みなご  
 山川のみなごあくよはりみしやうれしをかをつき乃拜むごうさ  
 御旅しも美さみやたりしも清きいきやる親かあしすたしみしやうち  
 三年かきねよす待なふいさあする願て自由あらぬ北京御旅  
 百氣ひきのへるさごや旅しめて朝夕きもの願算やあらぬ  
 思弟きや部揃てねかむや志ゆれごも與所しちも里前願てたはうれ  
 主の前御状拜よみひらく時や我胴やれはわごいつてごみやへる  
 何たひ芋のなかごましらひきさるち旅にまいる里か桐衣はるま  
 里か庭えなやものもひやぬはか唐土うちむかて笑てききゆさ

全

全

全

全

全

花風節

稻まつん節

全

伊集早作田節

るひさ節

かきやて風

かきやて風

かくさめにこたる石名子や何らぬ里かいまひつきのさんご、ゆる  
 里かひまごつきの近くなてさらめ夢もたもかけもあけくあごす  
 最早たすあせもうれ志ごきくの花に音信のにやむたちゆさ  
 佳例吉の御伽うたご三味線に百命引のへてあうふうれ志や  
 かれと志のあせむうちははれてからや夜のあけて日のあるまでも  
 夜のあけて日やあからはもよたしや巳午ごきまてや我手間をらめ  
 慶良間はいあらて石火矢ご、めかちひきふねやあごに那覇のみなご  
 あけくもごつれて慶良間崎はいあらてあかりてた拜て那覇乃みなご  
 いないまひんてちや夢やちやうも見たぬ御願引合にひあいまうちやさ  
 句そたるむかしわらら、ねはへる花やちりたて、もみちなても  
 かくれ木乃下にかくれ遊むゆたす目かねある里見付されて  
 庭のくほかすに馬やつあくごもたまたかけさごよ御肝くゆるあ  
 苦しやしゆてなけはあきゆんてごいゆるへ涙も押のこて笑てみせら  
 只にぬちやうも我身のたまんかけられすたか志ちやか我門に手巾掛て  
 あんくわたやとかていあ夫も持い我身やあまわらへ酒ごもてある  
 我山國あらひの田畑しゆるほかにの、ための何ゆか首里の主の前  
 入相のあねのたごの身にしみてきくもつれあまきや今日もくられて  
 嘉例吉の御船の渡中たし出れはあみもたしそひてはるかきよらさ

全

恩納節  
伊野波節  
かきやて風

中城はんだ前節  
久米はんだ前節

高ねく節  
白瀬走川節

くにや節  
全

しまだふ節  
つれかん節

やりこのし節  
全

伊集の木節  
赤さくはてき節

仲間節

いかり引乗て本帆矢帆もたちいまひのかちうたへは風もまごも  
染てあるあふのたなよめやすかもあからへてくたはきやしゆか  
恩納松下禁止の牌のたちゆす戀しのふまて乃禁止やないさめ  
伊野波の心志こむれ無藏つれて登るにやへも石こひれごさはあらふ  
かたかほのつきやす夢やちやうも見たぬかきやて風のつくりへたごつきやさ  
はんだ前乃下まむちゆわごゆくま三十まし三まし毛水こめて  
久米の五葉の松したえたの枕ら思わらへ無藏やわうてまくら  
高ねくにのほま真南向てみればかたほ船たいめを真帆こやゆる  
赤糸貫はちや里にうちはけてしろちゆぬき花やよるれわらへ  
くよのほそ鍋かなとはたかあちゆて脇文字わいへごちやうそはまひ  
脇文字わいへかはさみきりあんちやもろあんちや賜れ茶をひそはまひ  
諸純長濱にうちやひ引く波のしごこん宮童の目わらひはくき  
あんだかうて賜れしはもあうて賜れすて夫乃みるめあしやへら  
押列てたごま遊ごほしやあすかむちやり匂たかさわかてあそは  
よもつらのきよらさごく頼てをるあ縁ご肌をゆる浮世しらね  
心の伊集乃はなやあん美さ咲ゆい我身も伊集のこご真白さかあ  
あかさくはてさやみわたさんごたんごたまごね里や我身ごたんの  
仲間からかごて久志邊野古までも金武のにゆまへかなし御掛親島

ちるれん節

坂本節  
芋の葉節

ひやい〜節  
真福地のは  
いちやう節

早嘉手久節  
つなき節

大田名節  
しゆとん節

曉節  
本花風節

通水節  
全

東江節  
立雲節

百名節  
全

屋慶名節

こはむまかそろて願たごごなてたかぬし乃百歳御祝しやへら  
坂本乃いへやたんちと豊まれるごきよらがちゆもごこのみもご  
いもの葉乃露や真玉よかきよらさ赤糸あくまきにぬきやいはきや  
いもの葉やたもれ竹の葉やたきゆい蘇鐵葉のこごにそろていまうれ  
真福地のはいちやうやかれのものさらめいき廻り〜本につきやさ  
嘉手久思鍋かごごつけの多葉粉またもごごつけのもつれたはこ  
あたい芋やむみやいはたひん布をや玉金里らんしゆよすらよ  
田名小堀かごり能羽き川鳥あきけきれみやらへ田名乃宮童  
諸純みやらへの雪のろ乃はくきいつか夜のくれて美口すわあ  
暁やあゆひ〜さやたさうすみまやいか別るさめごめは袖のあみた  
三重城にのほまうちまねくあふき又もめくり來てむまふ御縁  
かひみつの山やひちゆひこゑてしらぬ乗馬ごくらご主ごみちや  
尾持くかる毛よ我無藏うちのせて通水の山やよへごこえたる  
東りあか〜れは夜のあけんごもて月ごぬきやかゆるごひし夜半  
東りたつ雲やごかほまにひきゆい遊ひしよいきゆるはたちみやらへ  
北谷真牛きやねか歌聲うち出せはなかへごふ鳥もよごて聞ゆさ  
あへごごごや〜き〜やはもよたしや隠れ思里か聞はきやしゆあ  
頼みあぬ我身やわくのいごご〜ろくりかへし〜ものよたもて

伊江節  
垣花節  
沉仁屋久節  
恩納節  
金武節  
伊集早作田節  
白瀬走川節  
謝敷節  
邊野喜節  
躍くはてさ節  
伊江節  
やくにや節  
こねん節  
首里節  
天川節  
稻まつん節  
與那節  
世榮節

菊みちちもごる我宿のつごにたたら花やてもちゆえたをたる  
圓覺寺御門の鬼佛かあし我無藏とこしゆすやたごちたはうれ  
按司そひか御船の渡中たし出れえ波はたしうひてえるふきよらき  
恩納嶽のほてたしくたまみれは恩納まつるねる手振きよらき  
こはや金武こはに竹や安富祖たけやねや志良垣にはりや恩納  
月夜やつきごもて明る夜やしらぬ童へうてまくらよや夜やあかち  
しらせはりあそになかれゆるをくらとて思里よぬきやいえけら  
謝敷いたひせにうちやひ引なみの謝敷みやらへの目笑はくき  
伊集の木のはなやゆん美さ咲ゆい我身も伊集のこごましらさかな  
くはてさの御月まご／＼ごてゆる與所目まごをかてしのてひまうれ  
あかまうち向てごひゆるなやをへるまつごまてはへるいやりもたを  
見る花にそてや引よごめられてつきのぬきやかてごもごて行きゆる  
御縁あて弟きやいさやうれしさをうちははれて遊へ我身もあうを  
まごまてをればこ／＼るさあものたそ風ごつれてこのていらあ  
天川のいけや干尋もたちゆらたれごもふふく思てたえうれ  
こご毛作りやあん美さよかて藏につんあまちまつんしやへら  
與那乃たかむらやあせはてこのほるむさうに思あせは車たう原  
今日のい／＼らしやたかむらいからしゆか首里天きやあし御祝やこご

龜甲節  
仲里節  
勝連節  
屋慶名節  
白鳥節  
津堅節  
本大浦節  
茶屋節  
濱千鳥節  
小濱節  
川平節  
大兼久節  
あかさ節  
瓦屋節  
昔嘉手久節  
七尺節  
ちやんな節  
東こま節

天乃ふれ星やんなか上ご照ゆるこかね三つ星や我上ごてゆる  
聞は仲里やはあのもごてもの咲ちらは一枝もたちたえうれ  
勝連の島やかごひほしやあすか和仁屋間門の潮のけやひあくて  
親乃ためしちやる肝のたあらぬ神乃御たまけのあるかうれしや  
御船の高艦に白鳥あるちをんしろごや／＼あらぬ思姉たすし  
勝連の按司やたんちごよまれるたけごもすかた人にかはて  
思子ごりもごちてきうたんごもてあはれあきんごにやつれ出ちる  
拜てのかれらぬ首里天きやあし遊てのかれらぬ御茶屋御殿  
旅やはまやご草の葉のまくらねてもわすら／＼ぬ我親のたそは  
小濱てる島やたんちよごよまれる大嶽はこしあてしらは前あち  
世間沙汰されるたいみやう屋のかんついつの夜の露に咲ちすゆか  
名護乃大兼久馬はらちいしやうとや舟はらちいしやうしや我浦泊  
深山くほたいんす経かけてたきあぬ我をいあこになごて油断ちやへめ  
瓦屋つちのや／＼眞南むかてみれば島乃浦ごみゆる里やみらぬ  
もいこはなこはなも乃もいやぬはかり露はうちむかて笑てさきゆさ  
あ／＼よみごはたえん経かけてたきゆく里かあかむ羽御衣ゆすらに  
むかしこごやすかあま／＼も肝よえすら／＼ぬものやあれあさけ  
ひかまごま躍我かくあちああんみやこせごをこりわるのこめか



金武節

全

全

池んとう節

津堅節

宇地泊節

綾蝶節

しほら節

松本節

かんきやい節

石の屏風節

なげやたけ節

彌勒節

阿波節

ふんやう節

高はし節

今歸仁の城節

久米阿嘉節

わすた山原のあたんはのむさろ志かは居らみしやうれ首里の主の前  
 首里をやく習やむや三味線きゆいなるこ聲ご聞ゆる我山國や  
 いつも山國やあるこ聲ごきゆるうちなら志く御伽しやへら  
 池んとう節 池んたうのあほやあほはやはあやい無藏ご一人あればのたごうしやあ  
 津堅節 津堅ごの渡中あせえてご漕ゆる無藏に思なせはちゆわわいくあから  
 宇地泊節 うち泊まさこてたごまさら志ゆる御月まさらしゆる濱の眞砂  
 蕾てをる花にちかつきゆるはへるゆの夜のつゆにさかち志ゆか  
 ふあめてもあかぬ白菊のえあにつゆのいろをて咲やるさよらも  
 獅子やまりつれををり羽遊ふ我身やごしつれてあそふうれしや  
 かたき打ごたる今日乃ほごらしやごすきし父親も嬉しやみしやいら  
 石の屏風節 石の屏風たて七重八重うちいつごまて船浮もたへるさかへる  
 なげやたけ節 なげやたけたんすたやくめさあ志歌にまされてご御側よたる  
 彌勒節 赤田首里ごのちこかね燈籠さけてたれかあか、れは彌勒御迎  
 阿波節 安波のぬんごのちこかね燈籠さけてたれかあか、れは彌勒御迎  
 ふんやう節 伊計はあれよめやありほしや、あすかいんあ川乃水乃くみのあくて  
 高はし節 泊高征にあんちやちはたごちいつか夜の明てごまいてさ志ゆら  
 今歸仁の城節 今歸仁のくすくしもあいのこねほ志喜眞乙樽めきやいえきやい  
 久米阿嘉節 阿嘉のひけ水や上んかえごふきゆる蒲戸小か肝やのほりくたり

久米の小波節

砂持節

まんくい節

八月節

本大浦節

平敷節

出砂節

本金長節

干瀬節

とくしやんま節

打豆節

うちまねく扇子ご御名残やふくて御嘉例吉た願揃てしやべら  
 あらのくますなやもてはきじられいたんてゆりごまり持たはうれ  
 親もた志夫や磯端乃んきやな我かもちゆる夫やむみやらもちまる  
 八月ああははあえむつきてもものあんしやりもあうへ我身もあそは  
 大浦みあごにせんごあかゆれは瀬嵩蒲戸小や目笑らひはくち  
 源河はりあはや潮あ湯か水あけんか宮童のたすてごころ  
 出砂のたくやゆそみたちもたへる眞鍋抱もたへる渡名喜里前  
 渡口からのほてはあ乃もご邊名地遊ひ健堅にごむし崎本部  
 干瀬にある鳥やみち潮うらみゆい我身やあかつきの鳥ごうらみゆる  
 島のふれものや鳥尻のごく志やんまあへあこは前あちごはな咲ゆさ  
 うちまめごまごめ我馬小にかいくはあ志遊ひにやの敷にすたち出ら  
 てん志やこの花やをやくんしやうれをよものもいく花ご花里あを物  
 花もたんでやご我身ふしきたもああたへ花やごもてや見ちやる  
 伊平屋のあんあ志童あんなしいきやす七離れ御掛みしやいあ  
 諸見や首里御國仲里や田舎いあか山國やえなやまかね  
 遊ひ諸見仲田あ志や眞勢理客仲里のこしご御行合しごころ  
 安波のまはんたや肝あかれごころ宇久のまつしたやねなしごころ  
 安富祖竹きやい志良垣やごねご金武ごはごごやゆよはた恩納

本田名節

きんぎもちむちやれたけこよいごれちやてたし縫しやる人の御上手やたら  
 間切てつやれは今朝拜てすてる間切わかされてあまごをかむ  
 首里天きやあし自由に拜まれめ按司かな志をかてをかたことうさ  
 首里こ山原や地つるきこやゆるこかこんみしやうお首里の主の前  
 押風もまたしやてかやうたしつれてあまやけ庭は出てかすどかけら  
 里の向かひす羽美衣すらんこもて今日乃とかる日にあすよかけら  
 たまこね里かあかひす羽美衣や今日のとかる日よかすよかけら  
 里か美衣たいもの淺地しちあよめ鳥わかえねのここにそめれ  
 たが宿かやゆら月の夜の上かひくや三味線の音のしほらしや  
 天のねにこひゆるわしのこまたかも野原をむ鳥またててうゆさ  
 花風節 手巾もちあければ與所の目のしけしやあまらこりあつけ手しやい招け  
 はなの島をてもなれし親兄弟のたもかけこたちゆるあさもゆさも  
 いきやをくらされお花の島んちゆのかにも淋しきる田舎をこま  
 菊のつゆ吸やちこせへるわらへ玉のさかつきにかけ乃うつて  
 たきゆきゆけはあよめさけこけをあよめ里かもてなしこ我胸や持る  
 尙 穆 王  
 いろ／＼の花にこころをかされすもこかしや、するお人のこころ  
 神 村 親 方

久仁屋節

たの宿かやとらたつねやいみほしや月に琴乃音の幽なゆす  
 月と日乃ひかりよくす雲霧や吹はらてたはうれそらの美風

思 納 あへ

金武節

あねへたやよかてし乃くしち遊てわすた世にあれはたごめされて  
 我山原習のいきやはかりしやべか引め志やうれ歌やのきてしやへら

遊 女 よまや

花風節

稻のほもあらぬ粟のほもあらぬやかれともこやかか、りすかま

美 里 王 子

あかめゆるうちにもかけやのこち山の端よいゆる月のたしき  
 仲島の小堀浮草やひかあ浦乃たて草やたかおむきゆか

大工廻親雲上安祥

琴の音もかすかてるつき乃かけもしみて吹笛の音のしほらしや

玉城親方 朝薫

比屋定節

後生の長旅やいきほしや、ないらぬ母のためやてごかこてひきゆる

本伊平屋節  
すき節

すてる我かいのちつゆほとたまぬあちや、母親のあきゆらごめは  
 節々あれは本草たいも志ゆい人よむまれこて我親しらす

瑞 慶 覽 昌 綱

珍らしいものやあらぬあやへまか音信よをかむしる志まてよ

厚作田節

宜野灣王子朝祥

三味線やわらへ美衣の袖こころをけは名のたもゆる浮世たいもの  
波風もたゝぬてるつきのかけにうゑふ釣舟のおたるきよらさ  
山かけのやどりえる人やをらぬこゝろなくさめるはあの色香

小橋川筑登之

本部按司朝救

天川節

人のしあさけに深山わすれたためゆるすはもこそぬ加籠の鳥や

津堅親方

長平屋節

小祿按司朝恒

天川のゆけにあそふたしごりのたもむえのちきり與所やしらぬ  
ごり乃伊平屋嶽やうちやかてごみゆる遊て打上ゆる我たまこかね  
肝急きあゆめやかて日もくれるあかごはるくこいきゆる道や  
月のてるここにひありある人の曇りあいなかけや世々のかゝみ  
たるにてやりこもてあたら花たきやか深さあるあさけ色にみせ  
秋ここに弟きやけふ乃こころて互にあかめらふにはの小菊  
誰に引されて女あてあしのこかごあの子繩ごまいて來ちやか  
こゑねたてまつん吳る人のをても引されてなれる我やあらぬ  
願の雨はやくふり下ちたえうれいろそひてさかる島や國も

垣花節

金武王子

沈や伽羅ごめてはあのものかたりゆつまでもなめにはひさらめ

池城里親雲上

十七八節

よゑゝめかあればあぢぢをられらぬ思わらへ使ににやきゆらごめは

與儀筑登之朝昌

命よりまさて惜さるるものやみはてらぬゆめのさめていきゆめ

兼本

ふますてゝいかはなさけあいなぬも乃ご思あしゆら人のよしやしらぬ

諏訪木工右衛門

ものちたてごこや田舎てごこやへる首里よりもまざる御寺わらへ

關勇助

白紙にふかく墨のいろそめて別かれてもむすふゝみの御ゑん

伊是名親方

よしあしやしらぬ歌敷や百首ゆめ乃間の浮世見ちやるしるし

仲尾次憲詮

昔ごこんてごいはあまも聞やるふたかちやの美代もめくり來ちやさ

與所乃上ごやすか聞はあつかしや一期つらさ身にくらすごめは

平敷屋朝敏子孫

高離節

高離島やものゑらせごころにやものしやへたんわたちたはうれ

脱身 和尙

さひじさにまかちしらぬ歌すれば與所乃もの笑の我伽なゆき

恩叔 和尙

この世人間やいつもかにさらめのこる人ないらぬ市の夕暮

瑞慶覽 朝紀

しる人乃ほかにかたら、ぬものやこゝろなくさめる酒の宿まみ

安仁屋 親雲上

よるごし乃もごち若くあられどめた、遊びみしやうれゆめの浮世

漢 那 庸 森

首里まうらはたんで思わらへつかて宿にたごつれやしらちたはうれ

歌ご三味線もあゆる我胴やれを名残思事ものすてしゆすか

うちとするあみも吹をさるかせも阿摩利うらめゆる音聲はかり

見れば覺ちやしゆさむかしの宿に静かたのゑたる人のこゝろ

なれぬ與所島やす、き葉のよけも打招くかたごたのみやしや乃

つれあきや浮世雨やふらぬする上下もごもにそてぬらち

いつもこの浦や泊てごいゆすかごめてごめら、ぬごの舟

雨もふりつめれおせも吹つめれ我身も聲たて、おかんしゆもの

蘭とりもかばしや錦よりきよらさたごるかたあいらぬ義理のまご

死出かやまみちにまぢかねらごめはいきのこる我身ごも、らみゆる

野邊のあはら屋につきもらちをても肝や十尋屋乃金の座敷

假のこの世界のゆめもいあさめてあまご極樂のみちにいゆる

あたし野にいけは歸る人やをらぬくきの葉のつゆご行衛さらめ

たみわらへすかちなまごたみしゆるむるし我身もたる人のあさけ

かきて奥山よ咲くえあやあらぬもてあえ乃あれば、やまやても

首里天きやなし御めくみのつゆにさかるうれしさや民の草葉

蘭の匂たちゆるはなの御座敷やあらす四つ竹のたごのしをらえや

ぼんくわたか歌よわらんきやか躍り見ふれ聞ふれに、や夜や明ち

胸の浮雲もえらてあま明のつきのこごさやかてらちみほしや

ゆきやしるな親のこゝろなくさめてうれしかを朝夕拜みほえやの

遊をゆためわらへいおたごあ、たる花のたもかをもみしりあねて

あかつきのわかれしらす鳥やは振合の夜もかたて吳らあ

仲村 良常

尙 育 王

聞はうれしきや原の人々の世果報いさなゆる晩のうたこゑ

尙 泰 侯

たゝしはたたひんをまごろめもすれえなれし故里も見ゆらやすか

大宜 見親 方

これまでよごもてあきむくふ浮世山ひくくねのあらぬまき

眞 謝 孝 覽

すたる夜のむろしたつねやいみれえさめてあつきのゆめ乃こゝち

川平 親方 朝範

あれまこの葉のたごつれをたいんす聞はあくをめになゆらやすか

野村里親雲上安趙

向ていこははいかほごにひやはもうしろそくるなやう誰にあても

今 歸 仁 朝 敷

朝夕わか願ひやせめてこはまこのいちきゆるやかにきもやなひさめ

時さらめ世話乃るるつれあきも浮世あらわしここのてくら

あせたのてわたる浮船のあらむやこゝろ眞帆ひきも自由もあらぬ

尙 順

君の御めくみや雨露のこごに四方にふり残をかたやないさめ

浮繩先ひかはうれしむごつれやかれよしの宿よるたてきかき

護 得 久 朝 置

まじきうち重ねいまむる日ご我身や朝夕肝のくわん御待えやへる

いちゆなしやあせれらこの頃や弟きや聲の音信もないらぬあすか

今年行ち八重山あけてくやう浮繩むすてある縁のいこの上から

出立るうてまかれとほつゝ旅のいきもごりほこまいまうれ

かにくましやあるひあわれ思無藏る別路のそてにすかてなけは

わすてはすら、ぬ友のたもかけやあかり立雲にひつものこゝ

浮世あかゝらす文や御万人のきものもてなしも清くあゆら

もたす芭蕉乃實のなひのあるごに君かひるかごもあにすあらあ

八十八月乃祝乃たもかけもひき寄て見ゆさ今日の座敷

ひよくをし鳥のちきりしちけふやとろつ代にまかるはしめさらめ

孫の心實や杖よつきみしやうちもゝの坂まてものほていまうれ

いつもこのやごや子孫そろて世々よつみまえゆるとねのまつん

すみ捨て美代に出てあかめらなむかりをみわたる夜半のたつき

御願ごこ濟ちはたごかちひまうれやまご口いらは美御迎えやへら

なからへてをればむかしくりもごち又も仲島のはあのおすむ

むねうちの玉のひかりあいぬたきゆめたごへ世の中やくらくあても

浮世わたりちもわらわられていまひめ行逢をかむこのまれにあさす  
ころされもすらぬわか身世乃中にそよふゆる節もいなまあたさ  
たんかあそ花のきんくきてむちやれよるてさめつるや千代のすかた  
年もたちかへてはつ春にあれを朝夕よろこひのこころはかり  
かれよしとうたて我の會釋しゆもの早くきいもうれ大和にしき

又 吉 全 道

護 得 久 朝 常

月の夜にあれはあわて覺出さあれを故里のあそひこころ  
心かあ世話こども吞はわすれよひ汲かわす酒さいのちさらめ  
ふゆるゆき霜も與所になちかたる埋火乃もこやはるのこころ  
かさあさりく埋火をたこちあられふる夜やあかしかねて  
大庫理乃たれ巻あけれわらへよかそしにゆくゆる雪のふゆさ  
誰ももここの浮世さめ人やのそて月花よ與所にあしゆか  
浮世かたわれのふねに棹さしてやみにこきわたるあみちこころ  
互にむねうち乃まこころ開きかたるいこころはや蘭のにはひ  
かあし子や孫乃たこあほじやこちゆてなこのとる年も與所にあしゆか

渡 嘉 敷 通 睦

まこと積わたる浮世こくふねよ乃よてあたあみのこけく立か  
うとろ指さるれもの笑あてもまここひこすち乃はちやかぬ  
蘭乃えあしのてわすれたきむかあかぬあかめたる梅のにはひ  
親のうきつらさしらぬあそあ志のすてききなため死出か山路  
わすてわすらぬいちもつくさらぬわか身たすけたる人のあさけ  
そしる人の肝のそしあ志よ見ちこそしられる人の實やしゆる  
義理たのてわたる浮世あらはしやわこやてもわこのまやあらぬ  
我のまここつくち與所のためすればよそためもなこのためこなゆる  
いけやういふいんて心ちこ出たすのあれこ面影のうしろをきゆる

當 間 親 雲 上 朝 宜

崎 濱 親 雲 上

大 宜 見 朝 春

摺る墨にあたのたまちりて心れは書きあか筆のさきも見らぬ  
こあさけのあまりふかさあるゆへに短氣みしきやさもまけくなゆる  
またをかむこころもしりあけあ我身乃心きやしかあ今宵別れくりしや  
こころある人のいこころはや花のらんの匂よりもまさてたちゆさ

備 瀬 筑 親 雲 上

日々にあらためてみかきこんすればなかりなぬ置めむねのゝみ

大里朝要

わか山のうちにすみわたる月乃るけに覺出ゆさはあのみやこ

新城安規

をかてうれたさや我肝はれくこ加籠よこひたちゆる鳥のこころ

那霸朝亮

存命をればやみの世の中もくまもこち仰く美代のひかま

伊波筑親雲上

聞はたもしろさこころるるひこの朝夕文のこゑや山よがき

座間味盛令

いきたらぬ我身やみきてよめ弟きやひねけ赤羽の袖合わきて

宜壽次里親雲上

存命をればそてふゆる節もめくるさめこもて志のてくらす

高宮城親方

のか我か胸やせめかこもならぬあまりこくうちゆる世話の志もく

人のおさけのまこころから出る心こころはのはなや蘭のにはひ

心やりしちくいれやう袖合たるこしに音信もきかも沙汰よしゆんて

時と見ち下るうらにこふ鳥のやかてすみおしゆら庭の樹

多嘉良朝正

我身かふしやならは御胸かなしくや我身とりもまさて思てたえうれ

親泊筑親雲上

眞北押風や我のいやこもれ眞南かせや無蔵かいやりこもら

濱元親雲上

るたて面白さ隙のあて互に寄合て遊はあやこしやよたむ

兼村筑親雲上

世界にてりわたる御日御月たひんをかこむら雲のあるよたいもの

眞榮城筑登之

年とくりもこすみちやあいぬあれはこころひさみこてもき延な

具志堅里親雲上

松の下るけやすたしやあんこもて露にぬれみしやうな旅のそらや

伊江朝永

包まらぬものやはなの匂きらめ七重ましうちよかくち何ても

森田筑親雲上

首里きやあしみやたま濟ち九月やかれよしのみらんちゆ拜てとてら

明雲こつれてこひたちゆるはへるむかていくこころ與所乃しゆめ

朝夕寄こころ與所の上も見ちゆて老のいこころのあまりこもあ

湧川親雲上

大宜見朝昆

池城親雲上

佐久本嗣順

伊是名朝直

祖慶筑親雲上

富盛按司

知念里親雲上

又吉全道

うちくまじや／＼もさねてご我身のほけくれも空にむかてなきゆる  
 いねけ赤羽乃袖合ゆへきらめくくれるやごま志のてひまむす  
 かにもつれあきめ與所島にをれえすみあれしやこのねごも聞ぬ  
 みれはうれしきやむかてきゆる年のよるやしのくゆるゆきの眞米  
 樂もくるしきもうち過し／＼このちやあてををやゆめの心地  
 またもあたらゆる節もあめ二人この世ふすて、いかぬうちま  
 御めくみのつゆにかはて御茶園や滴ごてもしける千代のみごり  
 てるつきの外に與所のたもしゆか山にあごかくも人の行衛  
 山の奥までもひごのあごまひてころろなて照す月のきよらさ

ものよ思ま志ゆさふゆ乃夜のそらの月に啼はたるはまの千ごり

大宜見朝知

上江洲由具

田崎朝用

上江洲由恕

摩文仁朝位

伊江朝常

小那霸朝親

顔やたくやまのくち木なてをてもきもやはつはるのはなのにはひ  
 たみちやけもすらぬをあてうれしきの覺らすに美衣乃美袖ごたる  
 かにある苦もも、このひこのてひ、のいごあみもすらあ、ゆめ  
 かたふきゆるつきに千ごりあく聲やあれま／＼のねもひ増さ  
 落るみあかみのはてやしらねごもうきよご、ろきの音のたかさ  
 たつぬれはむかしとしや志ら骨のさらあも、ちやあやも、のあわれ  
 きくもきむしきや冬の夜のそらのつきは啼わたるうらの千ごり  
 のやい遊ふたる竹馬のむらしたごな、てあまやゆめ乃ご、ち  
 さやかてるつきにたる呼ひ鳴かこひし渡地のうらの千ごり  
 御万人のまきりご、ろうちひらけ首里加那志御爲なゆらたいもの



かやり火乃けもりねやに立ちみちてあひちをられぬともよ出て  
深山住む人も御めくみよなひきまここ世よ出る御代になたさ

護得久朝良

たみちやけもすらぬまた拜けふやうれしや名残しや乃我肝せめて  
今年御登りやいつもりもまさうれしこはかり美つこみしやうま  
わむ住乃やこのほくた火やふつの蚊んたむのけるたよりあたさ  
松の葉よ燃ち蚊んのけよんて覺らすに我身も出てみちやま

金武朝芳

夕間暮やまはてこゝてるさあもの志乃てまふれ互にもたて遊は  
たまぬものたもてまごろめもすらぬほはれまちなる鳥のはつ聲  
すかたひきかはちこのあいよあてものよて君親のみこしひきゆる  
まごろめは夢のとひたこしく一人ね乃とむやあかしくりしや  
あさけあて今宵しはしまちみえやうれぬ旅宿の難面かたら  
あるこ西原よこなみとすらは日々たごつれもまれになゆら  
わかさたるかけて遊て暮あやうむきもごめらぬ月日たいもの  
みちいそく人も立よこて聞ら軒のつまかねの千代のむき  
もそなちやる菊のはなをりもまさて君かここの葉の匂のしほらしや  
いつからか我身のしゆる世話もゆるちこゝろやすくこ年もこゆる

七歳の時詠歌

夏乃まひるまやかん暑さ何ものすたえやわないこまいて遊ひほえやの

護得久朝惟

名に立る今宵一人をられゆめいもうち我か宿に月見されれ  
人のもたち吳たるいも酒のあすかけふや主したりまへひまやあられ  
使て吳てかほしいやさんてこしゆたる此あいたから我身も見欲あたさ  
嘉例吉乃御状さわあい待ひをたるいあいまふちいまひす夢も見たぬ  
あれぬ與所島やこゝてるさあものひまくやいもうち語てたえうれ  
島やえらくものたえかくちをすかのよてたもるけの手こて引か

西原里之子

庭のまつ乃葉にさわく夜あらし乃たこもしつめとる琴のしらへ  
四方にりわたる御代の御ひかりにさうわれて出るやまの住家  
御代も治ごひたくやまの住家てきややう立出らえなのみやこ

山内盛燕

御代のたごりに深山すむ人も眞道ふて出ることのしほらしや  
深山すむ人も美代にさそはれて仰く九重にのほるうれしや

新崎江順

我那覇朝周

つねよ身かこころ鏡よりまさるこころよしあきやてらしほしやの

仲尾次政雅

曇りあいなゆへに浮世さまく乃かけうつち照すきものかみ

仲尾次政模

物のあけうつすむねうちのかみさひつあぬここにみかけわらへ

仲尾次政昆

廉相よもてあすあむねうち乃鏡をいあしようつすたからたはもの

喜瀬知恵

こころあてみかち曇すあかみかけうつす間のたからたいもの

野村安暢

わらへ肝捨て人のみちつくち親の名もあけて世に名乃こせ

花城里之子

あわれつれあさや花の身よあれば餘多よそへらいのものくりしや

眞喜屋實珍

浮世さまくのたもああり明のつきにうちむかて鳥聲聞さ

いきやまくらしゆかやあれぬ磯をたに朝夕さんあみのたご聲聞て

登てごもいかはたんてあまくまに岩重しちをんてかたて吳やう

言ちもつくされめ子孫つれてあれし故里にのほていきゆす

佐久本喜章

夢のこの世界にのよてまたゆめのむかしこごまでも見せて吳よか

嘉手苧林隆

短か夜の慣やるにもつれななめかやりしゆるうちにや夜やあかち

宮里清孝

浮世樂々遊ばほしやあすかきも乃關開くおまもなひらぬ

山城正扶

御慈悲ある御代や關の戸もさぬ遊て樂のき上も下も

外間現敬

たしはしこもて立寄ひ聞は立ものかれらぬ琴のあらへ

御慈悲ある御代のあや門より外守あひぬ關の世界よあゆめ

渡口政發

御万人のまきりいつもわすれゆめ關の戸もさぬ御代のめくみ

謝花寛徳

餘所の國々にたんしゆこよまれる關の戸もさぬ首里の綾門

松田賀烈

義理もあさけも節々にこめて播ふる琴の音のしやらしや

山田有勳

夜々にこもし火のひかまあいぬぬれはひきやしくらされか上も下も

高良 睦順

夜々にこもし火のほゝらぬあれはいきや志くらしやへか夢の浮世

仲尾 次政均

夜やこもし火にあかつきや鳥の初聲聞ち起て油断るるな

山田 有選

夜のこもし火の一寸も放されめ我が屋あかゝらたあらたいもの

高良 陸輝

ねやのこもし火のあかゝらぬあれはあわて肝までもくらくあゆさ

山田 有度

孫かほしやしゆたる親のまがるうちに生れらぬたすこもゝらみゆる

こやいすてらなや約束よたかてつたつらになたるねやのまくら

まごかあしまたちかきる夜にあれえのこゝろ葉のかわて吳よる

伊保 マウシ

むかこしやたや生れたるしるしはあのあるあきりさたよ乃こて

トキノウシ

里よふやあれて一人身にあらはあはれ我がつらきたるまゆやへか

八幡 ノカマト

浅城紺染や下そめゆへきらめ紺屋にいろさめのごかやあいらぬ

〔古今琉歌集大尾〕

◎ 琉歌集の正誤

二十枚表面の十八行目

「いきぬれは「いきすれ」

二十枚裏面四行目「梅や」

は「梅や」の誤りなり

組躍出版豫告

諸君の御賞目に依り古今琉歌集の再版を完成致し候。斯道の爲め御同様慶賀の事には存候。更に来年夏を期し組躍を小冊に集めて出版致し度御承知の如く組躍は置懸前に琉球國劇の脚本として所謂「御冠解躍」に採りしれ清岡冊封使の面首に於て演られたけありて其中語の二條にして行文の流麗なる以て誦吟するに足るべく實に琉球古文學の精華と見ても可い言にあらす候。然るに世間にかりふれたる寫本中には仮名づかひの誤りあるは勿論甚だしきは脱句又はは蛇足を添へて俗意に陥れる杜撰のもの少からざるを以て最も正確の定評ある御冠解躍の寫本を刊行し安賣を以て諸君の諸君に願はんことを欲す。何れ出版の際に改めて紙上に廣告致し候間其節は何卒御賞願上候。以上

發行人 富川盛陸

琉歌集愛護の諸君

249  
48

所版  
有權

明治四十四年十二月十六日印刷  
明治四十四年十二月二十八日發行

編輯兼  
發行者

富川盛陸

那霸區字久米二千六百七十一番地

印刷者

當間嗣知

那霸區字泊三千九百四十二番地

印刷所

丸三活版所

那霸區字久米二千六百十二番地

發行所  
丸三活版所

定價金三十五錢



諸帳簿

廉價を旨とし

確實迅速より御

用達可仕候間

名刺類

何卒不拘多少

印刷物

御用命の程奉

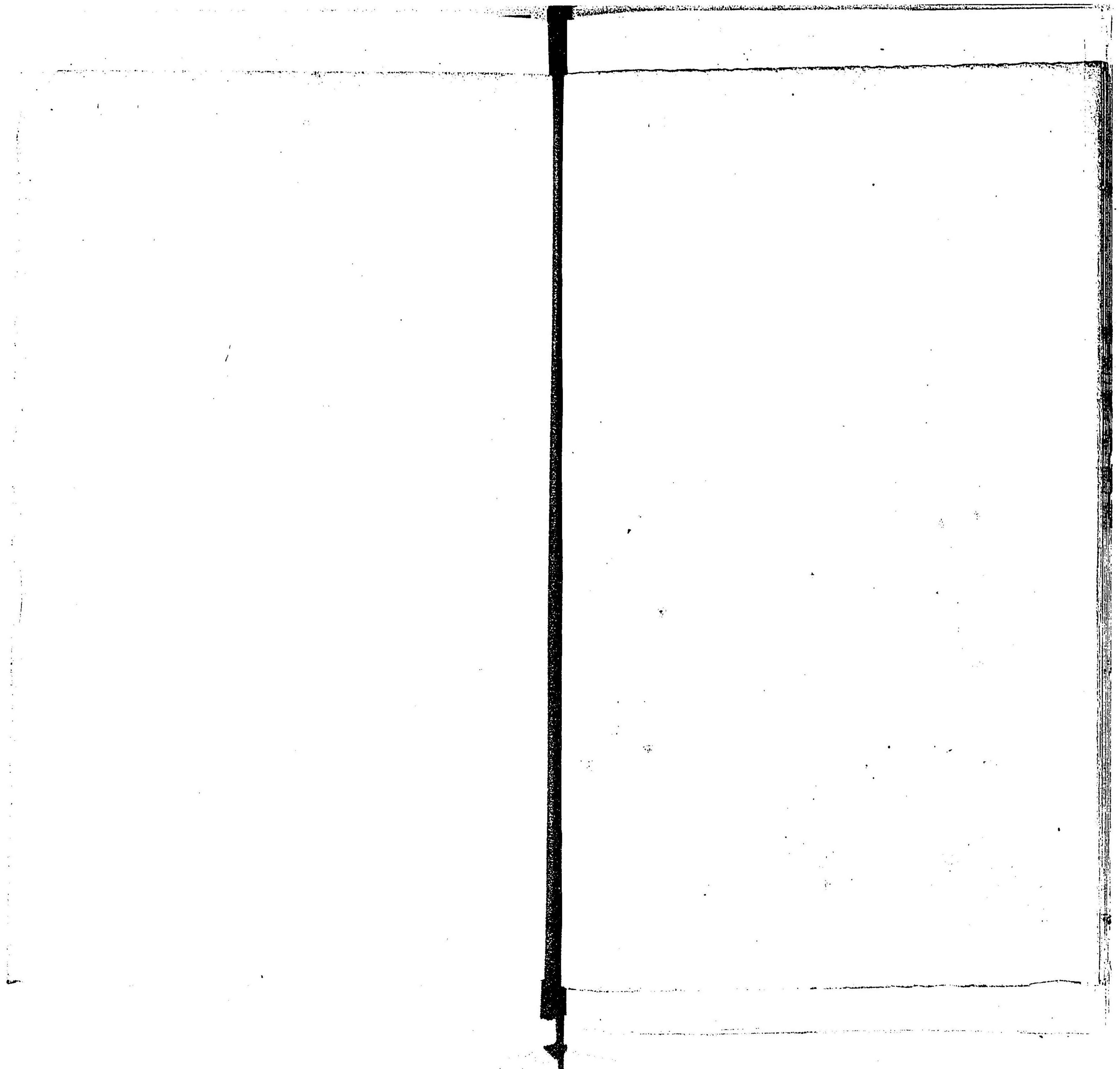
一切

願上候 敬白

那霸區字久米大門入口

丸三活版所





249  
43

